

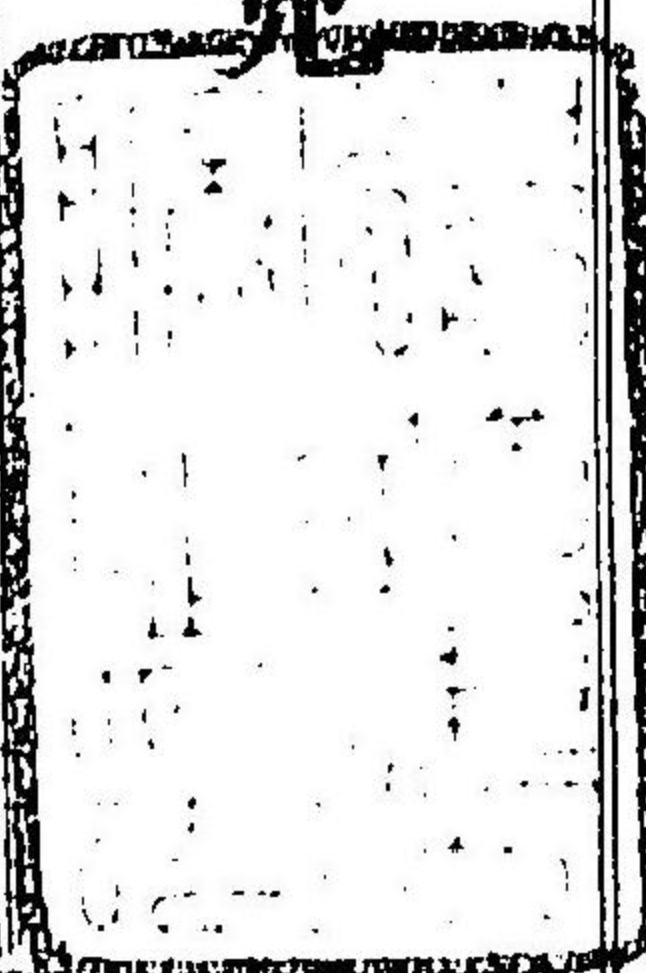
太政官大書記官兼參  
事官米國法律學士

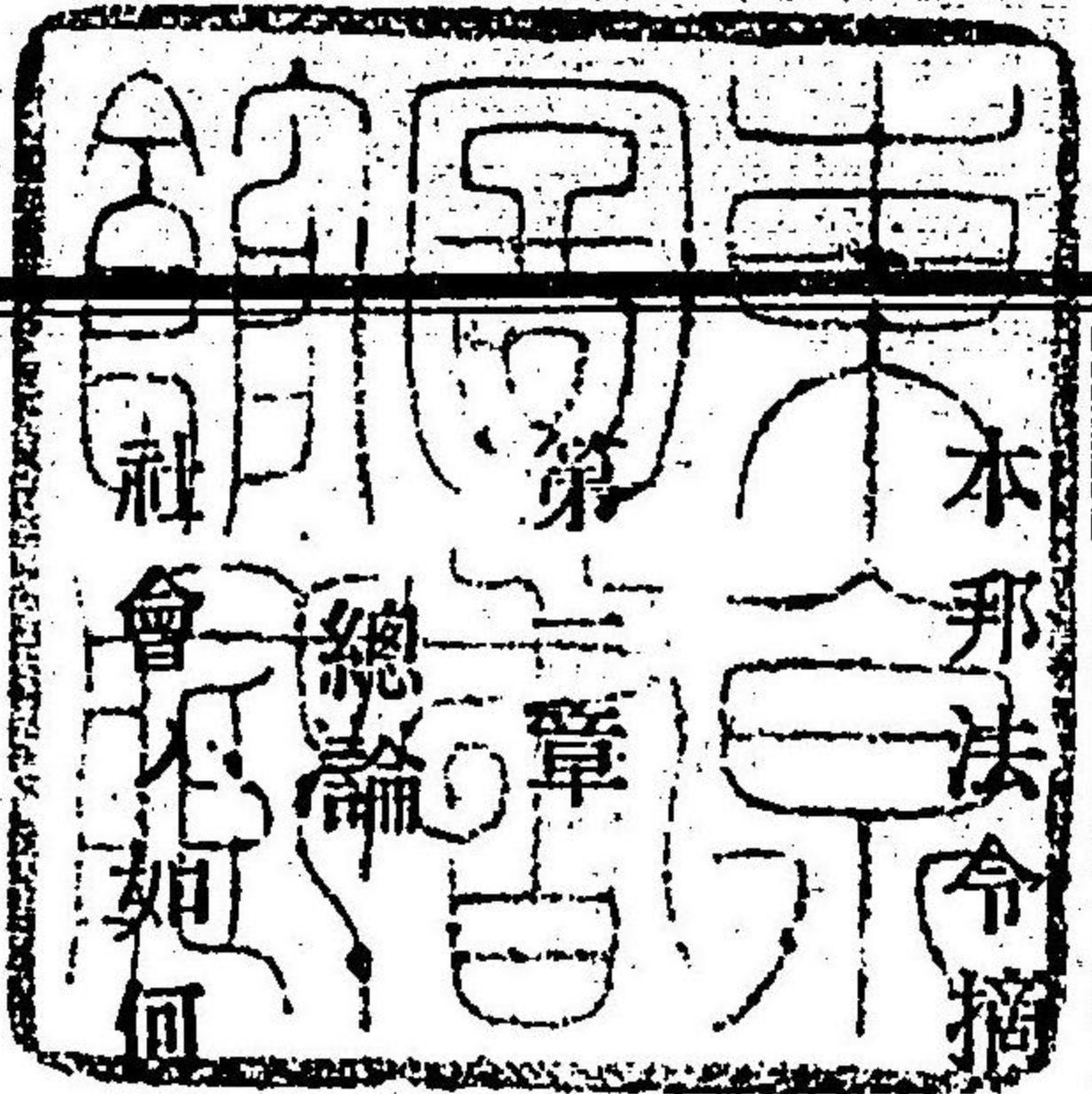
金子堅太郎講述

# 本邦法令摘要

東京

弘道書院發兌





本邦法令摘要

米國法律學士金子堅太郎講述

ヲ間ハス人群集スレハ之ヲ統御スルモノ  
 ラサルコトナシ統御スルモノナケレハ殺奪常ニ絶エス  
 上下ノ區別立タス邦國ノ体裁ヲ備ユルコトヲ得ス是レ  
 人ノ政府ヲ要スル所以ナリ其統御スルモノヲ名ツケテ  
 政府ト云フ  
 政府起レハ其政体ノ立君ナルト共和ナルトニ係ラス之

カ主宰ヲ立テサルヲ得ス其主宰ヲ名ツケテ帝王又ハ大  
統領ト云フ

政府起リ主宰立チ以テ社會ヲ統御スルトキニハ其統御  
ノ法則ヲ設ケサルヘカラス法則ノ設ケナケレハ人民各  
放恣ニ流レ國政齊一ナラス是レ人ノ法律ヲ要スル所以  
ナリ其法則ヲ名ツケテ法律ト云フ

我邦ハ 神武天皇ヨリ以來一系ノ 皇統國政ヲ統御シ  
給ヒシモノナレハ其間必ラス法律ノ設ケアラサルナカ  
ランヤ然レトモ上古ノ法令ハ舊記古書ニ散在スルモ未  
タ確定ナル條項ヲ備ヘタルモノナク又今日之ヲ詳知ス

ルニ由ナシ 推古天皇ノ時代ニ於テ厩戸皇子始メテ憲  
法十七條ヲ作ル是レ法律制定ノ創始トス然ルニ當時文  
運未タ開ケス從テ朝廷ノ制度モ亦未タ備ラサリシカ  
孝德天皇舊法改新ノ英斷ヲ施行シ給ヒ大ニ舊來ノ法令  
ヲ改メテ新法ヲ設定セラレシヨリ制度ノ完全始メテ此  
時ニ成就スルカ如シ 天智天皇ノ帝祚ニ登ラレシ初年  
鎌足ニ詔シテ 孝德天皇ノ律令ヲ損益シテ新ニ法律ヲ  
撰定セシム鎌足當時ノ諸賢ト謀リ專ラ隋唐ノ制度ニ倣  
テ舊法ヲ改定セリ是レ即チ近江朝廷ノ令ナリ其後 文  
武天皇百官ニ命シテ之ヲ修撰セシメテ天下ニ頒行セシ

ハ實ニ大寶二年ナリ次テ 元正天皇養老二年復タ之カ  
撰定ノ命アリテ終ニ律令ノ体裁全備スルニ至リタリ是  
レ所謂大寶律令ナリ此時ニ至リテ天下ノ政治總テ朝廷  
ノ統御スル所ニシテ此大寶律ハ即チ全國一般ノ法律ナ  
リ  
中世 皇威日ニ衰ヘ政權武門ニ移リ天下騷亂シテ干戈  
常ニ動キ群雄割據シテ兵馬ニノミ意ヲ用ヒテ曾テ法令  
ノ撰修ニ着手スルモノナシ賴朝覇府ヲ鎌倉ニ開キテ後  
北條氏天下ノ執權職トナルニ至リテ泰時諸學士ヲ集メ  
テ法律ヲ制定セシム是レ所謂貞永式目ナリ足利氏ノ北

條氏ニ代テ天下ノ政權ヲ擅ニスル時ニ當テモ其法律ノ  
如キハ皆貞永式目ニ據リタルモノニシテ或ハ其條目ニ  
就キ些少ノ改正ヲ施シタルニ止マルノミ  
德川氏天下ノ政權ヲ掌握シテ封建ノ制全ク備ハリタリ  
然レモ諸侯ハ各所ニ割據シテ各其藩制ヲ建テ國法ヲ設  
クルカ故ニ法律一定セス只幕府ノ法令ハ其直轄地ニノ  
ミ施スモノナリ而シテ德川氏ノ法律ノ如キハ地方凡例  
錄及現時司法省ニ於テ編纂中ナル德川禁令考ニ詳ナリ  
明治元年 王政舊ニ復シ同四年廢藩置縣ノ法律出テ天  
下皆郡縣ノ制度ニ復シ全國畫一ノ法律ヲ制定スルニ至

リタリ

本邦ノ法律規則ヲ分テ左ノ四種トス

第一 布告

第二 布達

第三 達

第四 告示

第一布告

布告ハ官民ニ關スル重要ナル法令ニシテ各省ノ長官其案ヲ起草シテ太政官ニ上申ス内閣之ヲ參事院ノ議ニ付シ參事院議決上申スルノ後之ヲ元老院ニ下付ス元老院

其議決ヲ上呈スルトキ太政大臣上奏シテ裁可ヲ乞ヒ主務ノ長官ト連署シテ公布スルモノナリ  
体罰及ヒ罰金ニ關スル法律ハ凡テ布告ヲ以テ制定ス然レトモ賭博及ヒ密賣淫ノ二法ハ當分ノ内警視廳及ヒ地方官ニ委任セラレタリ

第二布達

布達ハ各省ノ長官其案ヲ起草シテ太政官ニ上申シ太政大臣其主務ノ長官ト連署シテ公布スルモノナリ

第三達

達ハ太政大臣及ヒ各省長官其所轄ノ各官衙ニ達スルモ

ノナリ

布達及達ハ專ラ布告ノ旨趣ヲ擴充シ其目的ヲ疏通スル  
細目ヲ云フモノナリ

第四告示

告示ハ太政大臣及ヒ各省長官一時人民ニ公布スルモノ  
ニシテ布告、布達、達等ノ如ク永遠ニ繼續スルモノニアラ  
サルナリ

警視總監及ヒ地方官ハ布達、達、告示ノ名稱ヲ以テ規則ヲ  
設ケ其管轄内ニ頒布スルコトヲ得ルモノトス  
凡テ法律規則ハ達ヲ除クノ外一般人民ノ普ク知ラサル

ヲ得サルモノナリ故ニ若シ之ヲ知ラスシテ其條項ヲ犯  
ストキハ其法ニ據リ處分セサルヲ得ス何トナレハ凡テ  
法ヲ知ラサルヲ口實トシテ其處罰ヲ免ル、コト能ハサ  
ルハ法律ノ格言ナリ  
布告布達ノ施行期限ハ其日付ノ日ヨリ七日ノ後トス然  
レトモ東京ヨリ各府縣ニ到達スルマテノ日數ハ之ヲ除  
キテ起算スルモノナリ  
到達日數ハ各地方ノ遠近ニ由テ定メラレタルモノナレ  
トモ天災又ハ地變ニ因テ其日數内ニ到達セザルトキハ  
現ニ到達シタル翌日ヨリ起算ス

函館沖繩札幌根室ノ四縣ハ到達日數ヲ定メス現ニ縣廳ニ達シタル翌日ヨリ起算シ又島地ハ所轄郡役所ニ到達シタル翌日ヨリ起算スルモノトス以上ハ通常ノ場合ヲ云フモノナレトモ若シ布告布達ノ特ニ急施ヲ要スルトキハ即日ヨリ施行シ又或ル法律ニシテ特ニ其施行ノ日ヲ掲ケタルモノハ其日ヨリ施行スルモノトス

### 参照

明治十六年第十七號布告同十四年太政官第九十四號達同年太政官第一百一號達

## 第二章

### 官制

官制ヲ講述スルニ當リ其要領ヨリ細末ニ至マテ悉ク之ヲ擧ゲントスレハ日モ亦足ラス且ツ本書ノ旨趣ニアラサルナリ故ニ今其要領ナル大綱ノミヲ列記シテ其細目ノ如キハ皆減省スルモノナリ

### 太政官

太政官ハ 天皇陛下萬機ヲ總裁シ太政大臣之ヲ輔弼シ左右大臣參議之ニ議判參與シテ庶政ヲ統理スル所ナリ  
職制

太政大臣一員

天皇陛下ヲ輔弼シ立法行政ノ可否ヲ獻替スルコトヲ掌ル

左右大臣各一員

諸機務ヲ議判スルコトヲ掌ル太政大臣事故アルトキハ其代理タルヲ得

參議無定員

諸機務ニ參與スルコトヲ掌ル

參照

明治八年四月十四日太政官達

太政官中數局アリト雖モ其尤モ重要ナルモノヲ掲レハ即チ左ノ如シ

賞勳局

是ハ勳章授與外國勳章佩用ノ允許及褒賞授與等ノ事ヲ掌ル所トス

恩給局

是ハ恩給ノ支給方法ヲ管理シ陸軍海軍并ニ官吏一般ノ恩給ニ關スル事務ヲ掌ル所トス

參照

明治十七年太政官第二號達



參事院

職員ハ議長副議長各一人議官及ヒ議官補員外議官補  
ヲ以テ成立ツモノニシテ其事務章程ノ要領ハ左ノ如  
シ

第一 内閣ノ命ニ因リ法律規則案ヲ起草スル

第二 各省ヨリ上稟スル所ノ法律規則案ヲ審按スル

一

第三 地方議會ト地方官トノ間ニ於テ法律ノ見解ヲ  
異ニシ又ハ權限ヲ爭フトキ之ヲ審理スル

參照

明治十四年第六十號布告、同年太政官第八十九號達  
同十七年太政官第三十四號達

會計検査院

是ハ政府ノ會計ヲ検査シ會計法規ノ統一ヲ主持シ及  
歳入歳出ノ決算ヲ審査判定スル所トス

參照

明治十五年太政官第五號達

統計院

是ハ政治上其他諸般ノ事物ニ關スル統計表ヲ編製公  
布スル所トス

参照

明治十五年太政官第四十九號達

修史官

總裁ハ大臣之ヲ兼任シ其職務ハ修史ノ大体ヲ裁定シ  
其是非筆削ヲ管スル所トス

参照

明治十四年太政官第百八號達

外務省

外務省ハ外國交際ノ事務ヲ管理シ在外我交際官吏ヲ監  
督シ以テ國權ヲ保持スルノ所トス

職制

卿一人

大少輔

特命全權公使、辨理公使、代理公使ハ外國ニ駐在シ外務卿  
ノ指揮ヲ受ケ其國ト交際ノ事務ヲ擔任ス

總領事、領事、副領事ハ外國ニ駐在シ外務卿大藏卿ノ指揮  
ヲ受テ貿易事務ヲ管理シ兼テ外國人ノ其國ニ在留スル  
者ヲ保護ス

内務省

内務省ハ國內安寧人民保護ノ事務ヲ管理スル所トス

職制

卿一人

大少輔

大藏省

大藏省ハ全國財政ニ關スル事務ヲ管理スル所トス

職制

卿一人

大少輔

陸軍省

陸軍省ハ陸軍兵馬ニ關スル一切ノ事務ヲ管理スル所ト

ス

職制

卿一人

將官之ニ任ス

大少輔

將官之ニ任ス

海軍省

海軍省ハ海軍戰艦ニ關スル一切ノ事務ヲ管理スル所ト

ス

職制

卿一人

大少輔

文部省

文部省ハ全國教育ニ關スル事務ヲ管理スル所トス

職制

卿一人

大少輔

農商務省

農商務省ハ農業、商業、工作、技術、漁獵、商船、海員、海軍所管ノ

發明、商標、度量衡、開墾、牧畜、動植物ノ育種、獸醫、會社、軍人ヲ除ク、山、銀、鐵、行、道、鑛

燈臺、信、電、會、社 山林、驛遞ニ關スル法令ノ施行ヲ保持監督

ヲ除クスル所トス

職制

卿一人

大少輔

工部省

工部省ハ工業ニ關スル事務ヲ管理スル所トス

職制

卿一人

大少輔

司法省

司法省ハ裁判並ニ司法警察ニ關スル事務ヲ管理スル所

トス

職制

卿一人

大少輔

宮内省

宮内省ハ皇室ノ事務ヲ管理スルノ所ニシテ式部寮ヲ置

キ禮典ニ關スル事務ヲ管理ス

職制

卿一人

大少輔

元老院

職員ハ議長副議長各一人幹事二人及ヒ議官ヲ以テ成立

ツモノニシテ其章程ニ依レハ元老院ハ議法官ナルカ故

ニ凡ソ新法ノ制定及ヒ舊法ノ改正ヲ議定シ且ツ國事ニ

關スル上書建白ヲ受理スル所トス

参照

明治十三年太政官第六十號達同十四年同第廿五號

達同八年同第二百十七號達

諸省事務章程通則ニ依レハ各省卿ハ各省ノ行政事務ヲ  
 總理シ其所部ノ官屬ヲ統率監督シテ奏任官ノ進退ハ之  
 ナ太政官ニ具狀シ其八等官以下ハ判任スルノ權ヲ有ス  
 各省卿ハ主管ノ事務ニ付法律規則ノ制定廢止改正ヲ要  
 スルトキハ其案ヲ具ヘテ上奏シ又施行シ任ズル法律ノ  
 制定若クハ改正ニ就テハ元老院ノ會議ニ列シテ辨論ス  
 ルコトヲ得  
 法律規則布達ノ其主管ノ事務ニ屬スルモノハ各省卿之  
 ニ副署シ其執行ノ責ニ任ス  
 各省卿ハ所部ノ官屬ニ指令又ハ訓條ヲ下付シ又主管ノ

事務ニ付テハ地方官ヲ監督ス若シ地方官ノ處分法律規  
 則ヲ犯シ若クハ權限ヲ侵スモノアレハ之ヲ取消スコト  
 ナ得  
 各省ノ事務臨時ニ定額豫算外ノ費用ヲ要スルトキハ上  
 奏シテ裁ヲ請フモノトス  
 各省卿事故アルトキハ臨時命ヲ受ケテ他ノ省卿其事務  
 ナ管理ス  
 各省輔官ハ卿ノ職ヲ輔ケ卿ノ命ヲ以テ各省内部ノ事務  
 ナ代理スルヲ得

參照

明治十四年太政官第九十四號達

第三章

行政區畫

全國ヲ大別シテ府縣トシ府縣ヲ分ツテ郡區トシ又郡區  
ヲ細別シテ町村トス  
郡區町村編制法ニ依レハ町村ノ區域名稱ハ總テ舊ニ依  
ル又郡ノ區域廣濶ニ過キ施政ニ不便ナル者ハ一郡ヲ分  
テ數郡トナスコトアリ  
三府五港其他人民輻湊ノ地ハ別ニ一區トナシ其廣濶ナ  
ル者ハ區分シテ數區トナスコトアリ  
地方ノ便益若クハ人民ノ請願ニ由リ止ムヲ得サル理由

アルモノハ郡區町村ノ區域名稱ヲ變更スルコトアリ  
 右ニ掲ケタルモノ、内其郡區ニ係ルモノハ府知事縣令  
 ヨリ内務卿ニ具狀シ政府ノ裁可ヲ受ケ布告ヲ以テ之ヲ  
 全國ニ公布シ其町村ニ係ルモノハ内務卿ノ認可ニ止リ  
 テ之ヲ全國ニ公布セズ只府知事縣令之ヲ其管轄内ニ布  
 達スルモノトス  
 府縣官職制ニ依レハ府ニハ知事一人縣ニハ縣令一人ア  
 リテ左ノ事件ヲ掌ル  
 第一 部内ノ行政事務ヲ總理シ法律及政府ノ命令ヲ  
 執行スルヲ

- 第二 内務卿ノ監督ニ屬スト雖モ各省主任ノ事務ニ  
 就テハ各省卿ノ指揮ヲ受クルヲ
- 第三 法律及政府ノ命令ヲ執行スル爲メ其部内ニ布  
 達スルヲ
- 第四 地方稅ヲ徵收シテ部内ノ支費ニ充ツルヲ
- 第五 郡區長屬官以下ヲ判任進退スルヲ
- 第六 非常ノ事變アレハ鎮臺若クハ分營ノ將校ニ通  
 議シ便宜處分スルヲ
- 第七 府縣會ノ召集中止及其議案ヲ發シ又其決議ヲ  
 認可スルヲ



府知事縣令ノ下ニ書記官アリテ之ヲ輔佐シ其部内ノ行政事務ニ參判ス其次ニ警部長、收稅長、郡區長、屬警部、典獄、戶長等アリテ各其事務ヲ分擔處理スルモノトス郡區長ハ該府縣本籍ノ人ヲ以テ之ニ任シ特別ノ詮議ヲ以テ奏任トナスコトアリ町村ニハ戶長ヲ置キ其町村内ノ行政事務ト町村理事トノ二職ヲ併セ行ハシム而シテ戶長ハ府知事縣令之ヲ選任ス然レモ町村人民ヲシテ三人乃至五人ヲ選舉セシメ府知事縣令其中ニ就テ選任スルコトヲ得ルモノトス

參照

明治十一年第十七號布告、同年太政官第卅二號達、同十三年第十四號布告、同十四年太政官第九十八號達、同十七年同第四十一號達、同十七年同第四十七號達

### 第四章

#### 官規

官吏及其家族ハ他ノ物品ヲ買入レ之ヲ餘人ニ賣リ以テ利ヲ獲ルモノ或ハ他ノ生産ヲ買入レ製作ヲ加ヘ之ヲ販賣シテ利ヲ獲ル等ノ業ヲ禁ス然レモ神官教導職戶長郵便取扱人學區取締役及等外吏後備軍驅員ハ此限ニアラサルナリ

左ノ事件ハ官吏ト雖モ之ヲ禁スルコトナシ

- 一 礦山借區營業及田地ヲ所有シ利ヲ獲ル
- 一 田地家屋ヲ貸ス

#### 一 貸金ノ

一 所有地ヨリ生スル物産ニ製作ヲ加ヘ賣拂フ

官吏ノ家族ニシテ自己ノ財産ヲ以テ商業ヲ營マシト欲スルモノハ分籍別居スルニアラサレハ之ヲ營ムコトヲ得サルモノトス

官地官林及不用ノ物品等入札法ヲ以テ拂下クル時ハ其管廳ニ屬スル官吏及其代理人ハ之カ投票ヲナスヲ禁ス

官吏ハ道路河港ノ修築海陸ノ運輸土地ノ開墾及殖産ノ事業ヲ目的トスル會社ノ株主タルコトヲ得ルト雖モ其社ニ直接關係ノ職務アル官吏ハ其株主タルヲ得サルモ

ノトス

以上記載シタル制限ヲ犯シテ商業ヲ爲シタル官吏ハ刑法第二百七十五條ノ明文即チ官吏規則ニ違背シテ商業ヲ爲シタル者ハ二十圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處スト云フニ依リ之ヲ處分スルモノナリ

行政官吏服務紀律ニ依レハ官吏ハ左ノ責任ヲ有ス

第一 法律及職制章程ニ從ヒ各其職ヲ盡スヘシ

第二 太政大臣又ハ本屬長官ヨリ下ス處ノ達示ヲ循

守スヘシ

第三 所屬官ハ事ヲ本屬長官ニ受ケ其命ニ順ヒ職務

ヲ執行スヘシ

第四 職務ノ内外ヲ論セス廉耻ヲ勵マスコトヲ務ムヘシ

第五 官ノ機密ヲ漏洩スルコトヲ得ス其職ヲ退クノ後ニ於テモ亦同様タルヘシ

第六 他人ノ請託ヲ受ケ私ニ徇ヒ公ヲ亂ルコトヲ得ス

本屬長官ノ許可ヲ得サルヘカラサル事件左ノ如シ

第一 直接ト間接トヲ論セス本職ノ外ニ給料ヲ得テ他ノ事務ヲ行フ

第二 其職務ニ關シ他人ノ贈遺ヲ受ル

第三 職役ヲ離ル、コト及事ニ托シ病ヲ引キ職事ヲ

曠廢スル

右ニ列記スル條項ニ違ヒ顯狀アル者ハ本属長官其輕重ニ從ヒ旨ヲ諭シ職ヲ辭セシメ又ハ懲戒例ニ依リ處分ス長官ハ各其所属官ヲ檢察スルノ務ニ任ス又臨時巡察使ヲ派出シテ官吏ノ治績及功過ヲ檢察シ狀ヲ具シテ直ニ太政大臣ニ上申セシム

此官吏服務紀律ハ司法官吏ニモ亦通用スルモノトス然レモ事ヲ本属長官ニ受ケ其命ニ順ヒ職務ヲ執行スヘシ

トノ一項ハ司法官吏ニ適用セス又判事檢事ハ凡テ職務ニ關シ他人ノ贈遺ヲ受クルヲ得サルモノナルカ故ニ本属長官ノ許可ヲ得サルヘカラサル事件中第三項ハ適用スルモノニ在ラサルナリ

官吏職務上ノ過失(私罪ヲ除クノ外)ハ本属長官ニ於テ懲戒ノ權ヲ有ス然レモ府縣奏任官ハ太政大臣之ヲ懲戒スルモノトス其懲戒方法ハ左ノ三種トス

第一ハ譴責ニシテ本属長官ヨリ譴責書ヲ付ス

第二ハ罰俸ニシテ一月分十分ノ一ヨリ少カラス三月分ヨリ多カラサル者トス

第三ハ免職ニシテ本属長官ノ意見ニ從ヒ其奏任官ハ

具狀奏請シテ之ヲ免シ位記ヲ返上セシム

官吏恩給令ハ一般ノ文官勅任奏任判任トナ問ハス其本官奉職ノ年數及其年齡ニ依リ退官後之ヲ支給スルモノニシテ終身其恩給ヲ受ル官吏左ノ如シ

第一 滿十五年以上奉職シ年齡六十歳ニ至リテ退官

ヲ許シタル者

第二 年齡六十歳ニ至ラスト雖モ滿十五年以上奉職

シタル後廢官廢廳若クハ不治ノ疾病ニ罹リ其職ニ堪ヘサル者

第三 大臣參議各省卿元老院議長參事院議長ニシテ

滿二年以上奉職シタルノ後退官スル時其給額ハ俸給年額四分ノ一トス

第四 在職滿十五年以内ト雖モ公務ニ依リ不治ノ病

ニ罹リ又ハ重傷ヲ負ヒ其職ニ堪ヘス退官セシメタル者其給額ハ俸給年額四分ノ一トス

恩給金額ハ退官現時ノ俸額ニ依ルモノナリ而シテ奉職滿十五年ノ者ニシテ俸給年額ノ四分ノ一即チ二百四十分ノ六十トシ爾後滿一年毎ニ二百四十分ノ一ヲ加ヘ滿三十五年ニ至リ二百四十分ノ八十即チ俸給年額ノ三分

ノ一ニ至ツテ之ヲ止ム  
 奉職滿十五年ニ超ル者ト雖モ年齡未タ六十歳ニ至ラス  
 シテ自己ノ便宜ニ依リ退官ヲ請フ者又ハ服務紀律ニ違  
 ヒタル者ノ諭旨退官及懲戒處分若クハ刑事裁判ニ依リ  
 免官セシ者ハ恩給ヲ支給セサルモノトス  
 奉職年數ノ計算ハ明治四年八月ヨリ起算シ其以後ハ任  
 官ノ年月ヨリ起算ス又武官ヨリ文官ニ轉シ若クハ退官  
 後再ヒ任官シタル者ハ前官後官ノ奉職年數ヲ通算ス而  
 シテ恩給ヲ受クル者再ヒ官ニ就キ爾後退官ノ時其俸額  
 前官ヨリ少キ時ハ仍ホ前官ノ俸額ニ依リ恩給ヲ支給ス

ル者トス

勅奏任官奉職中既ニ恩給ヲ受クヘキ期ニ至リタル者及  
 其退官恩給ヲ受クル者死去セシトキ又ハ其期ニ至ラス  
 ト雖モ公務ニ依リ死去セシ時ハ其情狀ニ依リ特旨ヲ以  
 テ其寡婦(其本夫ノ在官中ニ入籍シタル者)ニ扶助料トシ  
 テ死者生存中ノ恩給年額四分ノ二以内ヲ終身支給スル  
 コトアリ若シ寡婦ナケレハ其繼嗣ノ孤兒男女并ニ實子  
養子ヲ問ハス  
 滿二十歳ニ至ルマテ之ヲ給スルコトアリ  
 判任官ハ奉職中既ニ恩給ヲ受クヘキ期ニ至リタル者ニ  
 シテ公務ニ依リ死去セシトキニ限り其情狀ニ依リ特旨

ヲ以テ前項勅奏任官ニ準スルコトヲ得然レトモ其扶助料ハ寡婦ニ止マリテ孤兒父母祖父母兄弟姉妹ニ及ハサル者トス

寡婦復籍若クハ再嫁シ又ハ死去シタル時ハ其扶助料ハ更ニ繼嗣ノ孤兒二十歳未ニ給ス若シ其孤兒ニシテ既ニ嫁娶シ若クハ管廳へ奉職シテ俸給ヲ受ケ又ハ諸官立學校ノ官費生徒トナリタル時ハ其扶助料ヲ給セス

扶助料ヲ受クヘキ寡婦孤兒ナク又ハ寡婦復籍若クハ再嫁シテ孤兒ナク尙ホ從來死者ニ依リテ生活セル父母又ハ祖父母アリテ他ニ之ヲ奉養スルノ子孫ナキハ其情

狀ニ依リ特旨ヲ以テ寡婦ニ相當セル扶助料三分ノ二以内ヲ終身支給ス又寡婦孤兒又ハ父母祖父母ナクシテ從來死者ニ依リ生活セル二十歳未滿又ハ二十歳以上ト雖モ癡疾不具ノ兄弟姉妹アリテ之ヲ教育スルノ親族ナキ者ハ其情狀ニ依リ特旨ヲ以テ寡婦ニ相當セル扶助料一ケ年分乃至五ケ年分ノ額ヲ一時限り支給スルコトアリ

恩給ヲ受クル者左ノ條項ニ該ルトキハ其時間ノミ之ヲ停ム

第一 公權ヲ停止セラレタルキ

第二 再ニ官ニ就キ俸給ヲ受クルキ

第三 事故アリテ日本人タルノ分限ヲ失フ者

第四 政府ノ許可ナクシテ日本國外ニ出タル者

然レトモ其者ニシテ公權ヲ剝奪セラレ又ハ禁錮以上ノ刑ニ處セラレ及前項ニ列記セル第三第四ニ該ルトキハ之ヲ止ムルモノナリ

官吏滿五年以上奉職ノ者十一年未滿ニシテ退官セシトキハ現俸給三ヶ月分ヲ給シ其滿十一年以上十五年未滿ニシテ同上ノ者ニハ現俸給四ヶ月分ヲ給ス然レトモ自己ノ便宜ニ依リ退官ヲ請フ者又ハ服務紀律ニ違ヒタル者ノ諭旨退官及懲戒處分若クハ刑事裁判ニ依リ免官セ

シ者ニハ總テ之ヲ給セス而シテ官吏在官中死去ノ者ハ現俸給三ヶ月分ヲ給スルモノトス陸海軍人等ノ恩給令アレトモ是ハ爰ニ省ク

參照

明治八年太政官第六十五號及第百五十二號達同十四年太政官第卅七號達同十五年太政官第四十四號及第四十五號達同九年太政官第三十四號達同十七年同第一號達



第五章

議會

議會ノ種類ヲ分テ府縣會及區町村會ノ二類トス

第一府縣會

府縣會ハ一府縣内ノ人民ヨリ徵收シタル地方稅ヲ以テ支辨スヘキ經費ノ豫算及其徵收方法ヲ議定スルモノトス

府縣會ニ通常會ト臨時會トノ二種アリ通常會ハ每年一度三月ニ之ヲ開キ其會期ハ三十日以内トス但區部郡部ノ二會アルモノハ七日以内ノ延期ヲ許ス臨時會ハ通常

會ノ外會議ヲ要スル事件アルトキ之ヲ開クモノニシテ其會期ハ七日以内トス

東京京都大坂ノ三府及神奈川縣ニ於テハ府縣會ヲ分テ區部會郡部會トナシ區部郡部ニ分別シタル事件ヲ議定セシム然レトモ此三府一縣ノ外區制ヲ設ケタル諸縣ニ於テハ政府ノ裁可ヲ經テ區部郡部會ヲ設クルコトヲ得ルモノナリ

府縣會ト區部郡部會トニ於テ議定スル事件ハ府縣會之ヲ定ムルモノトス

府縣會ノ權限左ノ如シ

第一 地方税ノ支辨ニ係ル經費ノ豫算及其徵收方法  
ヲ議定スルヲ

第二 地方税ノ出納決算ヲ審査スルヲ

第三 府縣内ノ利害ニ付キ建議スルヲ

第四 府知事縣令ノ諮問ヲ受クルヲ

第五 議事ノ細則ヲ議定スルヲ

第六 議員ノ退職者ヲ審査スルヲ

議員ハ郡區ノ大小ニ依リ每郡區ニ五人以下ヲ選ヒ其任  
期ハ四年トシ二年毎ニ全數ノ半ヲ改選スルモノトス此  
定數議員ノ外每郡區ニ補欠員トシテ豫メ十人以下ヲ增

選スルコトヲ得ルモノナリ又議長副議長ハ議員中ヨリ  
公選シ其任期ハ二年ニシテ議員ノ改選毎ニ之ヲ公選ス  
ルモノトス而シテ議長副議長及議員ハ俸給ヲ與ヘサル  
規則ナレトモ會期中ハ滞在日當及往復旅費ヲ給與ス其  
金額ハ會議ノ議決ヲ以テ之ヲ定ムルモノナリ  
議員ハ滿二十五歳以上ノ男子ニシテ其府縣内ニ本籍ヲ  
定メ滿三年以上住居シ地租十圓以上ヲ納ムル者ニ限リ  
左ニ記載シタル者ハ議員タルコトヲ得ス  
第一 瘋癲白痴ノ者  
第二 舊法ニテ一年以上懲役及國事犯禁獄ノ刑ニ處

セラレ滿期後五年ヲ經サル者若クハ新法ニテ公權  
ヲ剝奪及停止セラレタル者又ハ一年以上輕重禁錮  
ノ刑ニ處セラレ主刑滿期後五年ヲ經サル者

第三 身代限ノ處分ヲ受ケ負債ノ辨償ヲ終ヘサル者

第四 官吏教導職及陸海軍諸卒現役ノ者

第五 府縣會ニ於テ退職者トセラレタル後四年ヲ經  
サル者

議員撰舉人ハ滿二十歲以上ノ男子ニシテ其郡區内ニ本  
籍ヲ定メ地租五圓以上ヲ納ムル者ニ限ル者トス而シテ  
右ニ記載スル議員タルコト能ハサル者ノ條項中第一第

二第三第五ノ四項ニ觸ル、者及陸海軍々人現役ノ者ハ  
選舉人タルコトヲ得サル者トス

議員ハ會議ニ關スル事項ヲ以テ他ノ府縣會議員ト聯合  
集會シ又ハ往復通信スルコトヲ得サル者ナリ

常置委員ハ府縣會其議員中ニ於テ五人以上七人以下ヲ  
選ヒ其任期ハ二年ニシテ三十圓以上八十圓以下ノ月手  
當及往復旅費ヲ給與ス其金額ハ府縣會ノ決議ヲ以テ之  
ヲ定ムル者ナリ

常置委員ノ職權左ノ如シ

第一 府縣會ノ議定ニ依リ事業ヲ執行スル方法順序

及豫備費ノ支出ニ付キ府知事縣令ノ諮問ニ對シ意見ヲ述ル

第二 地方税ノ支辨ニ係ル事業ニシテ臨時急施ヲ要スル時ハ其經費ノ豫算及徵收法ヲ議決スル

第三 通常府縣會ノ初メ委員會會議ニ於テ議決シタル事件ノ要領ヲ報告シ且ツ通常會ト臨時會トヲ論セス議案ヲ前以テ請取り會議ニ向テ其意見ヲ報告スル

府縣會ハ人民ノ傍聽ヲ許スト雖モ府知事縣令ノ要メニ依ルカ又ハ議長ノ意見ヲ以テ傍聽ヲ禁スルコトアリ然

レトモ常置委員會ハ凡テ傍聽ヲ禁ス而シテ府縣會及常置委員會ハ議員半數以上出席モサレハ開會スルコトヲ得サルモノトス彼區部郡部アル府縣會ニハ區部郡部ノ議員各半數以上出席スルコトヲ要ス

府縣會ニ於テ若シ法律上議定スヘキ議案ヲ議定セス又ハ會期內ニ於テ議案ヲ議決シ終ラサル時ハ府知事縣令ハ更ニ其議定ヲ要セス内務卿ニ具狀シ其認可ヲ經テ之ヲ施行スルコトヲ得ルモノナリ又其會議ノ論說國ノ安寧ヲ害シ或ハ法律規則ヲ犯スコトアリト認ムルトキハ府知事縣令ハ會議ヲ中止シ内務卿ノ指揮ヲ乞フモノト

ス此場合ニ於テ内務卿ハ府縣會ヲ停止スルコトヲ得而シテ更ニ開會ヲ命スルマテハ府知事縣令ニ於テ地方税ノ經費豫算及徵收方法ヲ定メ内務卿ノ認可ヲ得テ之ヲ施行スルコトヲ得ルモノナリ又内務卿ハ何レノ時ヲ問ハズ其會議中國ノ安寧ヲ害シ或ハ法律規則ヲ犯スコトアリト認ムルトキハ議員ヲ解散スルコトヲ得ルモノナリ

### 第二區町村會

區町村會ニ三種アリ第一每區町村ニ開設スル者第二聯合數區町村會第三水利土功會トス

區町村會ハ區町村費ヲ以テ支辨スヘキ事件及其經費ノ支出徵收方法ヲ議定スル者ヲ云フ

聯合區町村會ハ數區町村ニ關涉スル事件アルトキ府知事縣令其區域ヲ定メテ開設スル者ヲ云フ

水利土功會ハ水利土功ニ關スル事項ニシテ區町村會若クハ聯合區町村會ニ於テ評決スルヲ得サルモノアル時府知事縣令特ニ其區域ヲ定メテ水利土功會ヲ開設スル者ヲ云フ

區町村會ノ議員選舉人及被選舉人ハ各其區町村ニ住居シ其區町村内ニ於テ地租ヲ納ムル者ニ限り又議員選舉

人ハ滿二十歲以上ノ男子ニシテ前ニ列記スル府縣會議員トナルコト能ハサル者ノ條項中第一第二第三ニ觸ル、者及陸海軍々人現役ノ者ハ選舉人タルコトヲ得サル者トシ議員被選人ハ滿二十五歲以上ノ男子ニシテ前ニ列記スル府縣會議員トナルコト能ハサル者ノ條項中第一第二第三第四ニ觸ル、者ハ被選人タルコトヲ得サル者ナリ

區會ノ議長ハ區長町村會ノ議長ハ戶長ヲ以テ之ニ充テ區會ハ區長之ヲ招集シテ其議案ヲ發シ町村會ハ戶長之ヲ招集シテ其議案ヲ發ス而シテ區會ノ評決ハ區長之ヲ

施行シ町村會ノ評決ハ戶長之ヲ施行ス若シ其評決ヲ不適當ナリト認ムル時ハ其施行ヲ止メ府知事縣令ノ指揮ヲ乞フ者トス

區町村ニ於テ議員ヲ選舉セス又ハ議員招集ニ應セスシテ會議ヲ開クヲ得ス及議定スヘキ議案ヲ議定セス又ハ會期內ニ於テ議案ヲ評決シ終ラサルハ區長戶長ハ經費ノ支出徵收方法ヲ定メ府知事縣令ノ認可ヲ得テ施行スルコトヲ得ル者トス

區町村會ノ議事若シ法ニ背キ又ハ治安ヲ妨害スルコトアリト認ムルハ區長ハ區會郡區長戶長ハ町村會ヲ中

止シ府知事縣令ニ指揮ヲ乞フ又府知事縣令ニ於テ同様  
 ノコトアリト認ムルモ何時タリトモ區町村會ヲ停止  
 シ又ハ之ヲ解散シテ改選セシムルコトヲ得而シテ停止  
 又ハ解散ヲ命シタルモ更ニ開會ヲ命シ又ハ改選スル  
 マテハ區長戸長ハ經費ノ支出徵收方法ヲ定メ府知事縣  
 令ノ認可ヲ得テ施行スルコトヲ得ル者トス  
 區町村會ノ會期、議員ノ員數、任期、改選及其他ノ規則ハ府  
 知事縣令之ヲ定メ又府知事縣令其管轄内ニ於テ町村會  
 ヲ開設シ得ヘカラサル狀況アルヲ認ムルモハ内務卿ニ  
 其狀シテ指揮ヲ乞フ者トス又聯合區町村會及水利土功

會ノ如キハ總テ此法律ニ準據スル者ナリ

參照

明治十三年第十五号布告、同年第四十九号布告、同十  
 四年第四号布告、同十五年第十号布告、同年第六十八  
 号布告、同十七年第十四号布告

## 第六章

## 租稅

租稅ニハ國稅、地方稅、區町村費ノ三種アリ又其外ニ備荒  
 儲蓄金ト稱スル一種ノ租稅アリ

國稅トハ全國一般ニ賦課スヘキモノニシテ大藏省ニ收  
 入シ國費ニ供スルモノヲ云フ而シテ國費ニハ經常歲出  
 ト臨時歲出トノ二類アリ

經常歲出トハ帝室費、内外國債償還、及其利子拂渡、年金恩  
 給、官省院局費、營繕土木費、府縣費、警察費、集治監費、備荒儲  
 蓄等ヲ云フ

臨時歲出トハ興業費、紙幣銷却元資繰入、軍備部繰入等ヲ  
 云フ

國稅ヲ收納スル方法ハ戸長其町村一人別帳ニ據リ租稅  
 金ヲ徵收シ受取タル日ヨリ七日以内ニ國庫金取扱所又  
 ハ大藏省爲換方ヲ經由シテ郡區長ニ上納ス郡區長ハ一  
 旬日間領收セル租稅金ヲ取纏メ三日以内ニ其府縣ノ收  
 稅長ニ送付ス收稅長ハ其領收セル稅金ヲ一旬日間毎ニ  
 取纏メ其翌日ヨリ七日以内ニ大藏省主稅官長ニ納付ス  
 主稅局ハ領收シタル稅金ヲ十日毎ニ取纏メ三日以内國  
 庫ニ納入スル者トス



各廳又ハ其部局ニ於テ直ニ領收シタル國稅ハ之ヲ大藏省租稅局出張所ニ送納ス又各裁判所ニ於テ領收スル國稅金モ亦其會計主任ヨリ之ヲ大藏省租稅局出張所ニ送納シ之ヨリ國庫ニ納入スル者トス

參照

明治八年第四百十號布告同十五年太政官第四十六號達同十七年大藏省第四十一號達國稅收納規則

國稅ノ科目左ノ如シ

- 一 海關稅
- 一 地租

- 一 礦山稅
- 一 北海道物產稅
- 一 酒造稅
- 一 蕎麥營業稅
- 一 烟草稅
- 一 證券印稅
- 一 郵便稅
- 一 民事訴訟用印紙稅
- 一 代言免許稅
- 一 船稅

一 車税  
 一 會社税  
 一 銃獵税  
 一 牛馬賣買免許税  
 一 賣藥税  
 一 度量衡税  
 一 版權免許税  
 第一  
 海關税ハ輸出入ノ物品ニ課スルモノニシテ其税額ハ各國ノ條約書ニ依リ百分ノ五ヲ超過スルコトヲ得サルモ

ノナリ  
 官員及其他政府ノ命ヲ奉シテ海外ニ渡航スル者ハ公用ノ荷物及本人相當ノ旅具ヲ除キ其他ハ凡テ商品同様ニ收税ス又彼等發着ノ前後輸出入又ハ他邦滯留中送致セル貨物等無税通關スヘキ旨大藏省ノ證書ナキモノハ商品同様ニ收税ス  
 華士族平民ノ自費ヲ以テ海外へ渡航スルモノ及雇外國人來着又ハ滿期歸國ノキ輸出入ノ物品ハ本人相當ノ旅具ヲ除クノ外凡テ商品同様ニ收税ス其相當旅具免税ノ荷物ヲ定ムルハ税關官吏ノ意見ニシテ本人之ヲ取捨増

減スルコトヲ得ス

参照

明治六年第二百十號布告海關輸出入荷物取扱條例

第二

地稅ハ地券ニ掲ケタル價額百分ノ二箇半ヲ以テ一年ノ定率トシ其年ノ豐凶ニ由リ之ヲ増減セス但北海道ハ當分ノ内地價百分ノ一トス  
租税金ノ内田方ニ限り當分人民ノ情願ニ任セ半額其府縣ノ地租改正ニ用ヒタル相場ヲ以テ代米納差許サレタリ

参照

明治十七年第七號布告地租條例同九年第一百六十一號布告同十年第八十號布告

第三

礦山借區稅ハ有礦質物即チ諸金屬ノ天然本質ヲ以テ出ル者或ハ他ノ物質ト合化シテ出ル者尤モ鉄ヲ除クヲ採取スル坑區ハ面積五百坪毎ニ一ケ年金壹圓ヲ徵收シ鉄及無礦質物即チ燃質物山鹽燐酸石炭美石及玉璞類ヲ採取スル坑區ハ面積五百坪毎ニ一ケ年金五十錢ヲ徵收ス廢鑛ヲ採取スル坑區ハ面積千坪毎ニ常例ノ稅額ヲ納メ

シムル者トス

参照

明治六年第二百五十九號布告日本坑法

第四

北海道物産税ハ鐵屬、穀類、酒類、麻、卵紙、生糸、器具ヲ除クノ外凡テ北海道ノ諸物産ヲ各府縣ヘ輸送スルキハ官私用品ヲ除クノ別ナク出港税トシテ貸主ハ其原價百分ノ四ヲ船政所ニ納ムルモトス而シテ其原價ハ各港ニ於テ毎月上中下旬三度ノ賣買相場ヲ蒐集シテ之ヲ査定ス然レモ其相場詳ナラサル物品ノ如キハ賣買仕切狀ヲ検査

シテ之ヲ定ムル者ナリ

参照

明治十年第五十六號布告北海道諸物産出港税則

第五

酒造税ハ酒類ヲ製造シテ營業スル者ニ課スルモノニシテ第一酒類免許税第二酒類造石税トス

第一 酒造免許税ハ酒類營業者カ毎年管轄廳ニ願出テ酒造場一ヶ所毎ニ免許鑑札ヲ受ルル之ヲ納ムル者トス

酒造場一ヶ所ニ付

金三十圓

第二 酒類造石税ハ免許ヲ受ケタル營業者カ製造ス  
ル酒類ノ石數ニ應シテ課スルモノニシテ其方法左  
ノ如シ

一類釀造酒(清酒濁酒其他釀造)壹石ニ付

金四圓

二類蒸溜酒(燒酎其他蒸溜)壹石ニ付

金五圓

三類再製酒(銘酒味咄白酒等釀造蒸溜ノ酒類ヲ調  
和シ又ハ之ヲ元トシテ製造シタルモ  
云フ)壹石ニ付

金六圓

自家用料ノ酒類(飲料ニ用ヒ醬油等ニ混和シ)  
及其他ノ用ニ供スルモノハ一

家内ニ於テ一期製造高壹石ヲ超ユルヲ得サルモ  
ノニシテ其製造免許鑑札料ハ一ケ年金八拾錢ト  
ス

参照

明治十三年第四十號布告酒造税則同十五年第六十  
一號布告

第六

醬麴營業税ハ醬麴(釀造酒類)ヲ製造スル營業者ニ課スル  
モノニシテ毎年管轄廳ニ願出テ製造場一ケ所毎ニ免許  
鑑札ヲ受ケ税金五十圓ヲ納ムルモノナリ

參照

明治十三年第四十一號齋翹營業稅則

第七

烟草稅ハ烟草製造人、烟草仲買人、烟草小賣人ノ三種ニ課スルモノニシテ第一營業鑑札料第二營業稅第三印稅トス

第一 營業鑑札料ハ烟草營業者カ管轄廳ニ願出テ營業仕入及出賣ノ三種ノ鑑札ヲ受クルキ納ムルモノニシテ其額左ノ如シ  
烟草營業鑑札料 一枚ニ付金二拾錢

同 仕入鑑札料 一枚ニ付金拾錢  
同 出賣鑑札料 一枚ニ付金拾錢  
第二 營業稅ハ烟草營業者カ毎年二期ニ納ムル所ノモノニシテ其額左ノ如シ  
烟草製造營業稅 一ケ年金十五圓  
同 仲買營業稅 同 同拾五圓  
同 小賣營業稅 同 同五圓  
第三 印稅ハ烟草製造人刻烟草ヲ製造スルキ左ノ量目ニ從ヒ玉造紙包又ハ箱詰ニ裝置シ相當ノ印紙ヲ貼用スルモノニシテ其方法左ノ如シ

量目	印稅	卸賣定價百匁ニ付 廿五錢未滿ノ分
五匁	二厘	
十匁	四厘	
十五匁	六厘	
(以下略之)		
量目	印稅	卸賣定價百匁ニ付 廿五錢未滿ノ分
五匁	三厘	
十匁	六厘	
十五匁	九厘	
(以下略之)		

卷烟草ヲ製造スルモノハ營業鑑札料及營業稅ノミニニシ  
テ印紙稅ヲ納メサルモノハ蓋シ勸業獎勵ノ目的ニ依リ  
外國輸入ノ卷烟草ヲ減少シ且ツ本邦ヨリ他國へ輸出セ  
シメント欲スルノ意ナランカ

參照

明治十五年第六十三号布告烟草稅則

第八

證券印稅ハ凡ソ財産ノ授受及契約ノ證明ニ用ユル證書  
帳簿ニ貼用スル印紙稅ヲ云フモノニシテ其證書帳簿ヲ  
分テ左ノ二類トス

第一類ノ證書帳簿ハ金高ノ有無多寡ニ拘ハラズ該法ニ列記シタル定規ノ印紙ヲ貼用スルモノナリ例ヘハ借家證文、雇人請合狀、金高記載ナキ約定證文、金高記載ナキ諸物品預リ証文等はナリ

第二類ノ證書帳簿ハ金高ノ多寡ニ從ヒ左ノ割合ヲ以テ印紙ヲ貼用スルモノナリ例ヘハ金錢借用證文、地所家屋賣買證文及金高記載アル諸物品預リ証文等是ナリ

金高一圓以上二十圓未滿 印稅 一錢

同 二十圓以上五十圓未滿 同 二錢

同 五十圓以上百圓未滿 同 四錢

(以下畧之)

同 四千圓以上 同 一圓

(以下畧之)

參照

明治十七年第十一号布告證券印稅

第九

郵便稅ハ日本政府ノ發行シタル郵便切手、郵便封皮、端書帶紙ヲ以テ之ヲ徵收シ其郵便物ヲ分テ左ノ四種トス

第一種 書狀 重量二匁每ニ 亦同シ 二錢



第二種 郵便端書 一葉

一錢

第三種 每月一回以上發行スル定時印刷物及其附錄

(一號一個重量十六匁每ニ滿十六匁未

滿亦同シ

一錢

二號又ハ二個以上壹束重量十六匁每ニ滿十六匁未

滿亦同シ

二錢

第四種 書籍、帳簿、各種ノ印刷物、寫真、書畫、繪圖、罌紙、營

業品ノ見本及雛形重量八匁每ニ八匁未滿亦同シ

二錢

書留郵便物ハ郵便局ノ帳簿ニ登記シ遞送配達ノ授受ヲ証明スルモノニシテ之レカ爲メ郵便物ノ種類ノ如何ニ

拘ハラズ手数料六錢ヲ徴收スル者トス

別配達郵便物ハ書留郵便ニ限ルモノニシテ通常配達ノ例

ニ拘ハラズ別ニ急速ノ配達ヲナスモノニシテ其配達料ハ

東京京都及大坂三府ノ市内ハ拾錢ニシテ其他ノ市内ハ

六錢トス市外別配達料ハ配達ノ郵便局ヨリ受取人ノ住

所ニ至ル路程ニ應シ十八町毎ニ六錢ヲ徴收スルモノトス

参照

明治十五年第五十九号布告郵便條例

第十

民事訴訟用印紙稅ハ訴狀ノ正本一通ニ付請求ノ金額若

クハ價格ニ應シ左ノ區別ニ從ヒ印紙ヲ貼用シテ之ヲ徵收スルモノナリ

金額五圓マテ 二拾錢

同 十圓マテ 三拾錢

同 二十圓マテ 六十錢

(以下畧之)

同 五千圓マテ 二拾五圓

同 五千圓以上ハ千圓マテ毎ニ二圓ヲ加フ

人事其他金額ニ見積ル可ラサル訴狀ハ正本一通ニ付凡テ三圓ノ印紙ヲ貼用ス而シテ金額價額ノ定リタルモノ

及金額ニ見積ル可ラサル人事ノ訴訟ヲ控訴スルキハ定規ノ印税ノ半額ヲ加貼シ又之ヲ上告スルキハ定規ノ印税ノ全額ヲ加貼スルモノナリ

左ノ書類ハ正本一通ニ付二拾錢ヲ徵收ス

- 一 答辨書、證據物寫、辨駁書、辨論書、上申書、陳述書等
- 一 證人鑑定人評價人引合人等ノ呼出ヲ請求スル願書

一 審判ノ延期ヲ請求スル願書

左ノ書類ハ正本一通ニ付五拾錢ヲ徵收ス

- 一 官吏ノ臨檢ヲ請求スル願書

一 財産差押又ハ物品公賣ヲ請求スル願書

一 執行命令書ヲ請求スル願書

一 身代限ノ處分ヲ請求スル願書

裁判言渡書ノ謄本ハ一枚五錢其他ノ謄本ハ一枚三錢ノ

割合ヲ以テ印紙ヲ其受取書ニ貼用シテ之ヲ徵收ス

勸解ハ一件毎ニ二拾錢ノ印紙ヲ貼用セシムルモノナリ

参照

明治十七年第五號民事訴訟用印紙稅規則

第十一

代言免許稅ハ代言免許ノ時金十圓ヲ納メ爾後ハ每年金

十圓ヲ納メシムルモノトス

参照

明治十三年司法省甲第一號布達代言人規則

第十二

船稅ハ現在ノ船舶ヨリ之ヲ徵收ス其稅率ハ左ノ如シ

西洋形蒸汽船 百噸ニ付一ヶ年 金拾五圓

同 風帆船 同 同拾圓

日本形船積石五十石以上百石ニ付同貳圓

日本形船積石五十石未滿

舩漁船小廻リ船積石ニ

長自舩梁三間迄ハ一ヶ年

金三十錢

但三間以上一間ヲ加フル毎ニ金十五錢ヲ増加ス

遊船

長自舳梁至艦梁三間迄ハ一年金五十錢

但三間以上一間ヲ加フル毎ニ金二十五錢ヲ増加ス

參照

明治十六年第十三號布告船稅規則

第十三

車稅ハ區戶長ニ於テ之ニ檢印シ其所有者ヨリ之ヲ徵收ス其稅率左ノ如シ

- 一 馬車三匹立以上 一ヶ年稅金三圓

一 同 一匹立 同 同二圓

一 荷積馬車 同 同一圓

一 人力車二人乘 同 同二圓

一 同 一人乘 同 同一圓

一 牛車 同 同一圓

一 荷積大七八車 同 同一圓

一 荷積中小車 同 同五十錢

參照

明治八年第二十七號布告車稅規則

第十四

會社稅

株式取引所ノ稅額ハ公債證書及株券等ヲ賣買取引スル  
 都度賣買双方ヨリ領收スル手数料ノ總金高十分ノ一ト  
 ス其手数料ハ現場取引ナレハ賣買金高千分ノ一ニシテ  
 定期取引ナレハ賣買金高千分ノ二ヲ超ユルコトヲ得サ  
 ル者ナリ  
 米商會所ノ稅額ハ米穀ヲ賣買スル都度賣買双方ヨリ收  
 領スル手数料ノ總金高十分ノ二トス其手数料ハ直取引  
 ナレハ賣買金高二千分ノ一ヨリ多カラサルモノニシテ  
 定期取引ナレハ千分ノ二ヨリ多カラサルモノトス

銀行稅ハ政府ヨリ銀行ニ下付シタル紙幣ノ千分ノ七ト  
 ス

參照

明治十一年第八號布告株式取引所條例、同九年第百  
 五號布告米商會所條例、同九年第百六號布告國立銀  
 行條例

第十五

銃獵稅ハ毎年十月十五日ヨリ四月十五日迄職獵遊獵ノ  
 免狀ヲ受ケタル者ニ課スル所ニシテ其稅額ハ職獵ナレ  
 ハ一圓遊獵ナレハ十圓ナリ

參照

明治十年第十一號布告鳥銃獵規則

第十六

牛馬賣買免許稅ハ一鼻綱ハッナニ付免許鑑札一枚トシ其稅金一ヶ年一圓タリ一鼻綱トハ鑑札一枚ヲ所持スル者ニシテ牛馬共七匹以内ヲ引キ得ルモノヲ云フ

參照

明治五年第三百三十號布告牛馬賣買規則

第十七

賣藥稅ハ丸藥、膏藥、煉藥、水藥、浴劑、散藥、煎藥等ヲ調製シテ

販賣スルモノニ課スル所ニシテ賣藥營業稅ハ藥劑一方ニ付一ヶ年金二圓其鑑札料ハ藥劑一方ニ付一枚トシ金二拾錢ヲ徵收ス

賣藥印紙稅ハ賣藥ノ定價ニ從ヒ營業者ヲシテ左ノ割合ヲ以テ相當ノ印紙ヲ貼用セシムルモノトス

印紙稅ノ割合

- 一 定價一錢迄 印稅一厘
- 一 同 二錢迄 同 二厘
- 一 同 三錢迄 同 三厘

參照

明治十年第七號布告賣藥規則同十五年第五十一號  
布告賣藥印紙稅規則

第十八

度量衡稅ハ各地方ニ於テ度量衡製作所ヲ設ケテ三器ヲ  
製造シ賣捌所ニ於テ之ヲ發賣シ製作原價ノ一分ヲ徵收  
スルモノトス

參照

明治八年太政官第三百三十五號達

第拾九

版權免許稅ハ圖書ヲ著作シ又ハ外國ノ圖書ヲ反譯シテ

出版スルモノニ課スル所ニシテ其免許料ハ製本六部ノ  
定價ヲ納メシムルモノトス

參照

明治八年第三百三十五號布告出版條例

地方稅

地方稅ハ地方收稅ノ類ニシテ其費用ニ供スルモノナリ  
其費用ノ科目ハ左ノ如シ

一 警察費

一 警察廳舍建築修繕費

一 土木費

- 一 區町村土木補助費
- 一 府縣會議諸費
- 一 衛生及病院費
- 一 教育費
- 一 區町村教育補助費
- 一 郡區廳舍建築修繕費
- 一 郡區吏員給料旅費及廳中諸費
- 一 教育費
- 一 浦役場及難破船諸費
- 一 諸達書及揭示諸費

勸業費

- 一 戶長以下給料旅費
- 一 地方稅取扱費
- 一 府縣廳舍建築修繕費
- 一 府縣監獄費
- 一 府縣監獄建築修繕費

以上費目互ニ流用スルコトヲ許サス

- 一 豫備費 豫算外ニ生シタル事件ノ費途及豫算ノ臨時不足ニ充ツル者

地方稅ノ豫算及徵收法ハ府縣會議決ノ後府知事縣令之ヲ認可施行スルモノトス而シテ其收納法ハ殆ント國稅



ト同一ニシテ只地方税ハ國庫ニ納入セス其府縣廳ニ取  
纏メテ其經費ニ充ツルモノナリ

地方税ハ左ノ目ニ從ヒ徴收ス

一 地租三分一以内

一 營業税并雜種税

一 戶數割

地租ハ國税ニシテ其稅率一ヶ年地券面ノ地價百分ノ二  
箇半ナリ然レモ又之ニ地方税ヲ課スルヲ得ルト雖モ其  
制限ハ地租ノ三分一以内ニ超ユルコトヲ得サルモノナ  
リ

營業税ハ商業工業ニ課スルモノニシテ其稅額ハ府知事  
縣令府縣會ノ決議ヲ以テ之ヲ査定スルモノナリ然レモ  
國税アルモノ即チ銀行、米商會所、賣藥營業、烟草營業ノ如  
キハ課税スルヲ得サルモノトス

雜種税モ亦府知事縣令府縣會ノ決議ヲ以テ其稅額ヲ查  
定スルモノニシテ其課スヘキ種類ハ左ノ如シ

料理屋、待合茶屋、遊船宿、芝居茶屋、飲食店ノ類

湯屋

理髮人

雇人請宿

遊藝師匠、遊藝稼人、相撲、俳優、幫間、藝妓ノ類

市場

演劇其他興行遊覽所

遊技場 玉突、大弓、揚弓、射的、吹矢ノ類

人寄席

船車 但國稅ノ額ヲ超過スヘカラス

水車

乘馬

屠畜

漁業採藻ノ類

戸數割ハ毎戸ニ配付スル租稅ニシテ是亦府知事縣令府縣會ノ決議ヲ以テ之ヲ查定スルモノトス而シテ東京京都大坂神奈川ノ如キ區部會ノ設アル所ハ區部會ノ決議ニ依リ政府ノ裁可ヲ得テ戸數割ヲ止テ家屋稅トナスコトヲ得ルモノナリ

參照

明治十三年第十六號布告地方稅規則、同十五年第二號布告、同十三年第十七號布告營業稅雜種稅、同十五年第三號布告

區町村費ハ區町村會ノ決議ニ依リ地價割、反別割又ハ戸

數割ヲ以テ之ヲ徵收シ其區町村ノ教育、土木、警察、衛生及  
區町村會費、戶長役場諸費等ノ費途ニ充ルモノヲ云フナ  
リ

### 備荒儲蓄

備荒儲蓄金ハ明治十三年ヨリ向廿ヶ年間非常ノ凶荒不  
慮ノ災害ニ罹リタル窮民ニ食料、小屋掛料、農具料、種穀料  
ヲ給シ又罹災ノ爲メ地租(國稅ノ部分ニ限ル)ヲ納ムル能  
ハサル者ノ租額ヲ補助シ或ハ貸與スルノ目的ヲ以テ各  
府縣ニ於テ土地ヲ有スル人民ヨリ地租ノ幾分ニ當ル金  
額ヲ公儲セシムルモノナリ

政府ハ每歲百廿萬圓ヲ支出シ其內三十萬圓ハ中央儲蓄  
金トシテ大藏卿之ヲ管掌シ九十萬圓ハ各府縣ノ地租額  
ニ應シテ之ヲ配付シ人民ヨリ公儲スルノ割合ハ府縣會  
ノ議決ヲ以テ之ヲ定ムルモノナレバ其總額ハ政府ヨリ  
配付スル金額ヨリ少カラサルモノトス

### 參照

明治十三年第卅一號布告備荒儲蓄法

### 租稅未納者處分法

凡テ租稅ヲ納メサル者ハ明治十年第七十九號布告ニ依  
リ之ヲ處分スルモノナリ其方法左ノ如シ

第一 國稅ノ徵收期限ヲ過テ尙ホ上納セサルキハ之ヲ賦課シタル財産ヲ公賣シテ徵收ス若シ其財産他人へ賣與讓與シタルキハ之ヲ買受讓受タル者ヨリ其税金ヲ完納セシムルモノトス但質入書入ノ財産ニ未納稅アルキ其債主ニ於テ辨納スヘシト申立ル者ハ其意ニ任セテ公賣ヲ行ハサルモノナリ

第二 營業稅ヲ上納セサルキハ其營業ヲ停止ス其製造品アル者ハ之ヲ公賣シ次ニ其器物ニ及ホスモノトス然レモ酒類造石稅ハ上文ニ依テ處分シ仍ホ酒造用ノ諸建物ヲ公賣スルコトヲ得而シテ酒類并酒

造用諸器物建物ハ自他ノ所有ヲ問ハス其一部又ハ全部ヲ公賣スルヲ得ルモノトス

第三 地方稅區町村費備考儲蓄金モ亦凡テ此規則ニ準シテ處分スルモノトス

凡ソ租稅不納ニ付財産ヲ公賣スルキハ先ツ公賣入費ヲ引去リ而シテ後國稅、地方稅、區町村費備考儲蓄金ヲ徵收シ剩餘アルキハ之ヲ本人ニ還付ス若シ不足アルキ國稅、地方稅ハ官ノ損失ニ歸シ區町村費ハ該區町村ノ損失ニ歸スルモノトス

國稅、地方稅不納ニ付財産ヲ公賣スルキ買請望人ナキニ

於テハ該財産ハ之ヲ官沒スルモノトス然レモ區町村費  
 不納ニ付公賣スルキ買請望人ナキニ於テハ官沒ノ手續  
 ナサス郡區長又ハ戶長之ヲ管掌シ區町村會ノ評決ヲ  
 取り府知事縣令ノ認可ヲ得テ之ヲ處分スルモノナリ  
 課税ニ關スル處分ニ就キ不服アリテ出訴セントスル者  
 ハ先ツ其旨ヲ申立課額ヲ上納シ領收證書ヲ添へ其翌日  
 ヨリ六十日以内ニ訴出ツヘキモノトス若シ納税期限前  
 ニ訴出テ未タ訴訟中ト雖モ納税期限ニ至レハ再ヒ課額  
 ヲ上納スヘキモノナリ

參照

明治十年第七十九号布告同十七年第十五号布告同  
 十五年第二十二号布告

第七章

國債

國債ニハ外國債ト内國債トノ二種アリ又外國債ヲ分テ  
 第一舊公債第二新公債トス抑舊公債ナルモノハ明治三  
 年英國ヨリ借入レタルモノニシテ其發行總額ハ金四百  
 八十八万圓ニシテ利息ハ年九分ナリ然レモ此公債ハ明  
 治十五年ニ於テ全ク償却シタルモノナリ今尙ホ殘存ス  
 ル外國債ハ獨リ新公債アルノミ而シテ此公債ハ明治六

年英國ヨリ借入レタルモノニシテ其發行總額ハ一千百七十一万二千圓ニテ利息ハ年七分ナリ元金ハ二ケ年据置キ三ケ年目ヨリ向二十三ケ年間ニ毎年償還スルモノニシテ是レ即チ國費ノ部ニ記載シタル經常歲出ヲ以テ年々償還スル所ノモノナリ

内國債ヲ分テ第一舊公債第二新公債第三金札引換公債第四秩祿公債第五金祿公債第六舊神官配當祿公債第七起業公債第八中山道鉄道公債トス  
第一舊公債ハ弘化元甲辰年ヨリ慶應三丁卯年マデ二十四ケ年間舊諸藩ニ於テ借用シタルモノニシテ元金ハ明

治五年壬申ヨリ明治五十四年マテ無利息五十ケ年賦トシ毎年之ヲ償還スルモノナ云フ然レモ天保十四癸卯年以前即チ弘化元年ノ前年マテ舊藩ニ於テ借入レタルモノハ公債トシテ政府ヨリ償還スルモノニアラサルナリ  
第二新公債ハ明治元戊辰年太政更始以後明治四辛未年七月廢藩マテ及明治五壬申年マテノ間舊諸藩縣ニ於テ借用シタルモノニシテ利息ハ年四分ナリ元金ハ明治八年ヨリ明治二十九年マテ二十二年ノ間ヲ限り大藏省ノ都合ニヨリ毎年或ハ隔年ニ抽籤ノ方法ヲ以テ償還スルモノナリ

第三金札引換公債ハ政府發行ノ紙幣ヲ交換支消スル爲メ發行シタルモノニシテ其元利共銀貨ヲ以テ仕拂ヒ利息ハ年六分ニシテ元金ハ公債証書交付ノ年ヨリ五ヶ年据置キ其翌年ヨリ向フ三十ヶ年ヲ限り毎年抽籤法ヲ以テ償還スルモノナリ而シテ此公債証書ト交換シタル紙幣ハ大藏省ニ於テ之ヲ燒却スルモノトス

第四秩祿公債ハ家祿奉還者ヘ附與スル爲メ發行シタルモノニシテ利息ハ年八分ナリ元金ハ家祿引換公債証書ヲ渡セシ三ヶ年目ヨリ七ヶ年間ニ政府ノ都合ニ由リ抽籤法ヲ以テ償還スルモノナリ

第五金祿公債ハ華士族平民トモ各自ノ家祿賞典祿給與ノ制限ヲ改メ一時ニ之ヲ下渡ス爲メ發行シタル公債証書ヲ云フモノニシテ其金祿元高年限及利息ノ區別ハ左ノ如シ

永世金祿元高賞典祿アルモノハ家祿ニ合計シテ元高トス七万圓以上ヲ有スルモノハ五ヶ年分ヲ金祿公債証書トシテ之ヲ下渡シ利息ハ年五分トス而シテ七万圓未滿ヨリ千圓以上ニ至ルマテ十箇ニ區別シ五ヶ年二分五厘分ヨリ七ヶ年半分マテノ年限ヲ其金祿元高ニ應シテ相當ノ公債証書ヲ下渡ス此利息モ亦年五

分ナリ  
 千圓未滿ヨリ百圓以上ニ至ルマテヲ十三箇ニ區別シ  
 七ケ年七分五厘分ヨリ十一ケ年分マテノ年限ヲ其金  
 祿元高ニ應シテ相當ノ公債証書ヲ下渡ス此利息ハ年  
 六分ナリ  
 百圓未滿ヨリ二十五圓未滿ヲ六箇ニ區別シ十一ケ年  
 半分ヨリ十四ケ年分マテノ年限ヲ其金祿元高ニ應シ  
 テ相當ノ公債証書ヲ下渡ス此利息ハ年七分ナリ  
 終身祿ハ永世祿年限十分ノ五ヲ給與シ利息ハ永世祿  
 ノ割合ト同シ

年限祿ノ利息ハ永世祿ノ割合ト同シキモノニシ十年  
 以上ハ永世祿年限十分ノ四ヲ給與シ十年未滿八年以  
 上ハ永世祿年限十分ノ三五ヲ給與シ年限祿ノ短縮ス  
 ルニ從ヒ次第ニ公債証書給與ノ割合ヲ減却ス  
 此公債証書ノ元金ハ凡テ五ケ年間之ヲ据置キ六ケ年  
 目ヨリ大藏省ノ都合ニヨリ毎年抽籤法ヲ以テ之ヲ消  
 却シ都合三十ケ年ニ悉皆之ヲ償還スルモノナリ  
 第六舊神官配當祿公債ハ各社領朱黑印地并除地收領中  
 ヨリ從前配當受來リシ舊神官ノ配當高ヲ祿制ニ引充テ  
 之ヲ金額ニ換ヘ五ケ年分ヲ公債証書トシテ一時ニ下渡



スモノニシテ利息ハ年八分ナリ元金ハ公債証書ヲ渡セ  
シ三ケ年目ヨリ七ケ年間ニ政府ノ都合ニ由リ抽籤法ヲ  
以テ償還スルモノナリ其配當高ヲ祿制ニ換ユルノ方法  
ハ左ノ如シ

配當現米千石以上ハ祿制現米ノ三百石ニ引換ヘ千石  
未滿ヨリ五石マテヲ細別シテ二百八十石ヨリ五石マ  
テノ祿制現米ニ割付ケ相當ノ石高ニ引換ユルモノナ  
リ

第七起業公債ハ全國中公益ノ事業ヲ興シ物産繁殖ノ道  
ヲ開キ内外ノ商賣ヲ盛ニスル爲メ新ニ募集セシ一千二

百五十万圓ノ内國債ヲ云フモノニシテ利息ハ年六分ナ  
リ元金ハ二ケ年間据置キ三ケ年目ヨリ向二十三ケ年ヲ  
限リ毎年大藏省ノ都合ニ由リ抽籤法ヲ以テ之ヲ償還ス  
ルモノナリ

此公債ヲ以テ募集セシ金員ハ京都敦賀間鉄道建築野蒜  
築港阿仁院内鑛山開坑其他勸業土木等ノ費用ニ充テシ  
モノナリ

第八中山道鉄道公債ハ群馬縣下上野國高崎ヨリ岐阜縣  
下美濃國大垣ニ至ルマテ中山道ニ沿ヒ及ヒ大垣ヨリ三  
重縣下伊勢國四日市ニ至ルマテノ鉄道ヲ敷設シ及ヒ其

事業ヲ經營スルノ資金ニ充ツルモノニシテ其發行高ハ  
 二千万圓ヲ限り大藏卿工業ノ都合ヲ計リ漸次之ヲ發行  
 スルモノナリ而シテ利息ハ年七分ニシテ元金ハ証書發  
 行ノ年ヨリ五ヶ年据置キ其翌年ヨリ向二十五ヶ年ヲ限  
 リ毎年抽籤法ヲ以テ之ヲ償還スルモノナリ  
 右八種ノ内國公債中ニ於テ舊公債新公債秩祿公債金祿  
 公債舊神官配當祿公債ハ皆ナ記名ニシテ其公債証書ニ  
 所有主ノ姓名ヲ記スルモノナリ然レモ金札引換公債起  
 業公債中山道鉄道公債ハ無記名ナルカ故ニ書換又ハ管  
 轄廳ノ檢印ヲ受ル等ノ手數ナク賣買授受等凡テ各自ノ

隨意ナルモノナリ

内國公債ノ中獨リ金札引換公債及ヒ中山道鉄道公債ハ  
 何人タリトモ賣買授受スルヲ得ルトノ明文アルカ故  
 ニ外國人モ之ヲ賣買授受スルヲ得ルモノトス然レモ  
 其他ノ内國公債ハ其條例ニ由リ外國人ニ賣買授受スル  
 ヲ禁セラレタリ  
 此等ノ公債証書ヲ亡失シタルキハ其事由并証書面ノ金  
 高記号番号等ヲ詳記シ其亡失セシ地ノ管廳ヲ經テ大藏  
 省ニ届出ツヘキモノトス然ルキニハ大藏卿ハ其証書ノ  
 賣買授受ヲ差止ムヘキ旨ヲ告示スルモノナリ

凡テ公債ニ關スル條例ハ政府ノ都合ニ依リ要用ノ事アレハ利子ノ割合及元金償還年限ヲ除クノ外之ヲ增補改正スルヲ得ルモノナリ

参照

第三統計年鑑明治八年第九十五號布告新舊公債証書發行條例同十六年第四十八號布告金札引換無記名公債証書發行條例同八年第三百三十號布告同九年第三百八號布告金祿公債証書發行條例同十年第三十二號布告同十一年第七號布告同年大藏省甲第十三號布達起業公債條例同十六年第四十七號布告中山

道鐵道公債証書條例

第八章

戶籍

戶籍ハ政府ノ尤モ重ツヘキモノナリ人民保護ノ任政府ニアレハ其戶數人員ヲ審知セサルヲ得ス戶數人員ヲ審知スレハ百般ノ政務自ラ之ニ依テ以テ修マルモノナリ而シテ維新以前ハ各地方其法ヲ異ニシ錯雜尤モ甚シ然レモ各地方皆ナ戶籍ノ事ハ郷帳或ハ宗門帳ト稱スル檀家寺ノ帳簿ヲ基本トセリ然ルニ太政維新ノ後明治四年四月四日ヲ以テ始テ戶籍法ヲ制定シ從來寺院ノ管理ス

ルモノヲシテ官衙ニ移シ以テ一層其管理ヲ嚴密ニセリ  
戸籍法ヲ整頓シテ政務ノ用ニ備ヘント欲スル箇條數多  
アリト雖モ今其要領ヲ左ニ列記セン

第一 警察上ノ取締

第二 收税ノ基本

第三 徴兵適齡ノ調査

第四 學齡兒童ノ調査

第五 人口ノ調査

戸籍ハ地方ノ便宜ニ從ヒ區畫ヲ定メ戸長ヲシテ其區内  
ノ戸數人員生死出入等ヲ掌トラシム

戸籍ニ登記スル事件ハ左ノ如シ

- 一 出產
- 一 棄兒
- 一 死亡
- 一 婚姻及離婚
- 一 養子女並相續人貰受及離縁
- 一 戸主嗣子女相續養子女及相續人廢立
- 一 私生子
- 一 相續
- 一 失踪

- 一 氏名及身分變換
- 一 廢家絕家及再興
- 一 分家及復歸
- 一 轉籍

婚姻

華士族平民互ニ結婚スルハ無論外國人ト日本人ト結婚スルコトハ其人ノ望ミニ任スト雖モ獨リ華族ハ華族令第九條ニヨリ婚姻スル前先ツ宮内卿ノ許可ヲ受ルヲ要ス

士族平民ノ結婚ハ願ニ及ハス其時々戸長ニ届出テ送籍

ヲ乞フニ止ル然レモ外國人ト結婚スルモ先ツ政府ノ許可ヲ乞フヘキモノトス

外國人ノ日本人ニ嫁シ又ハ入婿シタルモノハ日本人ノ分限ヲ得而シテ日本人ノ外國人ニ嫁シ又ハ入婿シタルモノハ日本人ノ分限ヲ失ヒ且ツ其身ニ属シタルモノト雖モ日本ノ不動産ヲ所有スルコトヲ得サルモノナリ

婚姻セシ者ト雖モ未タ送籍セサレハ法律上之ヲ夫婦ト稱スルヲ得サルハ一般ノ法規ナレモ或ル場合ニ於テハ未タ送籍セサルモ其男女ノ親族及近隣ニ於テモ之ヲ夫婦ト見做シ其待遇ヲ與エシキニハ送籍ノ有無ニ係ラス

之ヲ夫婦ト見做スコトアリ  
私生子

妻妾ニアラサル婦女ニシテ分娩スル兒子ハ一切私生子  
ヲ以テ之ヲ論シ其婦女ノ引受トス然レモ男子ヨリ其私  
生子ヲ以テ己レノ兒子ト見認ルキハ其婦女住所ノ戸長  
ニ乞ヒ其免許ヲ得ヘキモノトス  
相續

華士族ノ家督相續ハ必ス總領ノ男子タルヘキモノトス  
然レモ若シ其總領ノ男子死亡又ハ癩篤疾等不得已ノ事  
故アレハ次男三男又ハ女子ヘ養子相續ヲ許スモノナリ

次男三男及女子ナキハ血統ノ者ヲ以テ相續セシムヘ  
キモノトス但華族ニシテ養子セントスル者ハ先ツ宮内  
卿ノ許可ヲ受クルヲ要ス  
婦女子一タヒ家督ヲ相續シテ後夫ヲ迎へ又ハ養子セシ  
キニハ直チニ其夫又ハ養子ヘ家督ヲ相續セシムルモノ  
ナリ  
華士族ノモノ幼少ニシテ家督スルキハ其親戚又ハ他人  
ノ内ニテ相當ノ者ヲ撰ミ後見人ヲ置クヘキモノナリ  
再相續トハ一タヒ隱居シタルモノニシテ實子又ハ養子  
ノ家督ヲ再ヒ相續スルモノナ云フ

父兄伯叔凡テ目上ノ者ニシテ子弟甥等目下ノ家ヲ繼承  
 スルキニハ相續人ト稱シ養子ト稱セス實子アル者ニシ  
 テ養子ヲ以テ相續人トシ又女子アルノ寡婦ニシテ夫ヲ  
 迎ヘテ前夫ノ跡相續人ト定ムルコトハ許スヘキモノニ  
 非ラサレモ極貧或ハ老病等ニテ實子孫アリト雖モ其人  
 幼少ナルカ又ハ有子ノ寡婦タリモ極貧或ハ其子女幼少  
 ニシテ且後見スヘキ者ナキモニハ親族協議ノ上願出テ  
 不得已事情アルモノハ地方官ニ於テ之ヲ許スコトヲ得  
 ルモノナリ但本項ハ士族平民ニノミ適用スルモノニシ  
 テ華族ニハ之ヲ適用スルヲ得サルモノナリ

失踪

失踪トハ逃亡又ハ其他ノ事故ヲ以テ其踪跡分明ナラサ  
 ルモノヲ云フ而シテ失踪後當人ノ年齢八十歳以上ニ及  
 フキハ其人ヲ戸籍ヨリ削除スルモノトス

廢家絶家

廢家トハ男女ノ戸主(其身實子養子家女他女若クハ相續人タルヲ問ハス)其家名ヲ  
 廢シ他家ヘ入夫縁付或ハ養子女トナリ又ハ實家ヘ復籍  
 スルモノ等ヲ云フ

絶家トハ戸主死亡又ハ除籍ノ日ヨリ六ヶ月以内ニ相續  
 人ヲ届出サルキハ其家ヲ以テ自然ニ絶ヘタルモノト見

做スヲ云フ  
分家

華士族ニシテ分家スル者ハ平民籍ニ編入ス然レモ從前  
合家シタルモノハ其合家シタルモノ、一代中ニ限り再  
ヒ分家復舊スルコトヲ許サレタリ然ルニ又明治九年第  
七十五號布告ヲ以テ凡テ合家スルコトヲ禁セラレタリ

參照

明治七年第七十三號布告、同六年第廿七號布告、同六  
年第廿八號布告、華士族家督相續條規、同年第二百六  
十三號布告、同年第百三號布告、外國人結婚條規、同年

第廿一號布告、同九年太政官第五十八號達

第九章

地所

我邦ノ土地ハ從來假令人民ノ所有タリトモ漫リニ之ヲ  
賣買スルコトヲ得サリシカ明治五年第五十號布告ヲ以テ  
地所ノ永代賣買ヲ許サレタリ然レモ又同年第百廿四號  
布告ヲ以テ人民所有ノ地所ヲ外國人ニ賣渡シ又ハ之ヲ  
書入トナスコトヲ禁セラレタリ

地租改正ノ令ヲ以テ同時ニ全國ノ土地ヲ點檢シ從前ノ  
石高ヲ改テ反別トナシ又年貢米ヲ改テ地價割ノ税金ト



ナス而シテ土地所有者ヲ確實ナラシムルカ爲メ地價帳  
 ナ作り之ヲ地方廳ニ備ヘ置キ地券ノ下渡及書換ヲ管理  
 セシム然ルニ明治十一年府縣官職制ヲ改定セラレテヨ  
 リ地券ノ下渡及書換ハ殊ニ郡區長ニ委任ヒラレタリ故  
 ニ今日ニ至テハ地價帳ハ郡區役所ニ備ヘ置クトハナ  
 レリ地價帳ニ基キ地券臺帳ヲ作り之ヲ戶長役場ニ備ヘ  
 置キテ土地所有者ヲ確實ナラシメ且ツ收税ノ基本ヲ定  
 ム又土地賣買讓渡與書割印帳及地所質入書入與書割印  
 帳ヲ作り土地ノ賣買讓渡及質入書入ヲ管理セシム  
 土地ノ名稱區別ハ明治七年第百二十號布告ニ由テ定メ

ラレタリ今其法律ヲ左ニ掲ケントス

官有地

第一種 地券ヲ發セス地租及地方税ヲ課セス

一 皇宮地 皇居離宮等ヲ云フ

一 神地 伊勢神宮山陵官國幣社府縣社及ヒ民  
 有ニアラサル社地ヲ云フ

第二種 地券ヲ發シ地租及地方税ヲ課セス尤モ府

縣所用ノ地ハ地券ヲ發セス唯帳簿ニ記入

ス但シ此地ニアル官舎ヲ貸渡スルハ借地

料ヲ賦スヘシ

一 皇族賜邸

一官用地 官院省使寮司府縣本廳裁判所警視廳  
陸海軍本分營其他政府ノ許可ヲ得ル  
ル所用ノ地ヲ云フ

第三種 地券ヲ發セス地租地方稅ヲ課セス但人民

ノ願ニヨリ右地所ヲ貸渡スキハ其間借地

料ヲ納メシム

一山岳丘陵林藪原野河海湖沼池澤溝渠堤塘道路  
田畑屋敷等其他民有地ニアラサルモノ

一鐵道線路敷地

一電信架線柱敷地

一燈明臺敷地

一各所ノ舊跡名區及公園等民有地ニアラサルモノ

一人民所有ノ權理ヲ失セシ土地

一民有地ニアラサル堂宇敷地及墳墓地

一行刑場

第四種 地券ヲ發セス地租地方稅ヲ課セス

一寺院大中小學校說教場病院貧院等民有地ニア

ラサルモノ

凡ソ官有地ハ人民ニ使用ヲ許シタルモノヲ除クノ外其  
所在區町村費ノ賦課ニ應セサルモノナリ然レモ道路疏

水等ノ爲メ該區町村へ手當金ヲ給與スルハ各適宜タリ  
民有地

第一種 地券ヲ發シ地租地方稅ヲ課ス

一 人民各自所有ノ確証アル耕地宅地山林等ヲ  
云フ

但此地賣買ハ人民各自ノ自由ニ任スト雖  
モ若シ潰シ地開墾等ノ如キ大ニ地形ヲ變  
換スルハ官ノ許可ヲ乞フヲ法トス

一 人民數人或ハ一村或ハ數村所有ノ確証アル  
學校病院鄉倉牧場秣場社寺等官有地ニアラ

サル土地ヲ云フ

但此地賣買ハ其所有者一般ノ自由ニ任ス  
ト雖モ若シ潰シ地或ハ開墾等ノ如キ大ニ  
地形ヲ變換スルハ官ノ許可ヲ乞フヲ法ト  
ス

第一種中ノ土地ヲ許可ナクシテ開墾スルモ  
ノハ地租法第二十六條ニ依リ三圓以上三十  
圓以下ノ罰金ニ處ス

民有地第一種ノ土地ヲ區別シテ左ノ二類トス

第一類 田畑郡村宅地市街宅地鹽田鑛泉地

第二類池沼山林原野雜種地

第一類中又第二類中ノ各地目變換スルモノヲ地目變換

ト云フ

第二類ノ土地ニ勞費ヲ加ヘ第一類地トナスモノヲ開墾

ト云フ

第一類又ハ第二類ノ土地ニシテ山崩川欠押堀石砂入川

成海成湖水成等ノ如キ天災ニ罹リ地形ヲ變シタルモノ

ヲ荒地ト云フ

第二種 地券ヲ發シテ地租地方稅ヲ賦セス

一官有ニアラサル鄉村社地及墳墓地火葬場等

ヲ云フ

一民有ノ用惡水路溜池敷堤敷及井溝敷地

一公衆ノ用ニ供スル道路

但其地形ヲ變換スルトキハ管轄廳ノ許可

ヲ請ヘシ

第二種中ノ土地ハ免租地ナルカ故ニ許可ナ

クシテ其地形ヲ變換スルキハ地租法第廿六

條ニ據リ三圓以上三拾圓以下ノ罰金ニ處ス

地價ハ其地ノ品位等級ヲ詮定シ其所得ヲ審査シ尙ホ其

土地ノ情況ニ應シ之ヲ定ム而シテ其地價ハ地目變換又

ハ開墾ニ非サレハ之ヲ修正セス若シ全國一般ニ地價ノ  
 改正ヲ要スルキハ前以テ其旨ヲ布告シテ後之ヲ施行ス  
 ルモノナリ  
 開墾セントスルモノハ地方廳ノ許可ヲ受ケ十五年以内  
 ノ歛下年期ヲ得ルモノトス若シ其年期明ニ至リ開墾成  
 就セサレハ更ニ十五年以内歛下繼年期ヲ許ス但其年期  
 中ハ原地價ニ依リ地租ヲ徵收スルモノトス  
 荒地ハ其被害ノ年ヨリ十年以内免租年期ヲ定メ年期明  
 ニ至リ原地價ニ復ス然レモ免租年期明ニ至リ尙ホ荒地  
 ノ形狀ヲ存スルモノハ更ニ十年以内免租繼年期ヲ定ム

ルモノナリ

免租年期明ニ至リ其地ノ現況原地價ニ復シ難キモノハ  
 十年以内七割以下ノ低價年期ヲ定メ年期明ニ至リ原地  
 價ニ復ス然レモ原地價ニ復シ難キモノハ其地ノ現況ニ  
 依リ地價ヲ定ム  
 低價年期明及ヒ免租年期明ニ至リ原地目ニ復セス他ノ  
 地目ニ變スルモノハ其地ノ現況ニ依リ地價ヲ定ム荒地  
 ノ内ニ於テモ川成海成湖水成ニシテ免租年期明ニ至リ  
 原形ニ復シ難キモノハ更ニ二十年以内免租繼年期ヲ許  
 ス其年期明ニ至リ尙ホ原地目ニ復セス他ノ地目ニ變セ

ナルモノハ川海湖ニ歸スルモノトシ其地券ヲ還納セシムルヲ例トス

土地賣買讓與

土地ヲ賣渡又ハ讓渡サント欲スル者ハ讓渡証文ニ地券ヲ添へ其地ノ戸長役場ニ差出シ奥書割印ヲ乞フ戸長ハ地所質入書入奥書割印帳ヲ見合セ登記ナキニ於テハ讓渡証文ニ奥書割印ヲナス  
奥書割印ノ濟ミタル後買受人又ハ讓受人ハ地券裏書換ヲ乞フ爲メ戸長役場ヲ經テ管轄廳ニ願ヒ出ツ其願書ニハ双方連印ノ上地券ヲモ添ユルモノトス此場合ニ於テハ

地券証印稅ヲ拂ハシム

土地所有權ノ移轉ハ戸長カ讓渡証文ニ奥書割印シテ後之ヲ買受人又ハ讓受人ニ附與シタル時ニ在リト雖モ未タ地券書換ノ濟マサル間ハ依然地租及地方稅ハ地券ニ記載セル姓名ノ者ヨリ之ヲ徵收ス  
死亡者失踪者ノ家督相續若クハ遺產相續及ヒ離縁戸主ノ家督相續ニ由リ土地ヲ讓受ケタル者ハ親族ト連印ノ上戸長役場ヲ經テ地券裏書願書ヲ管轄廳ニ差出スモノトス此場合ニ於テハ券面代價ノ有無ニ拘ラス券狀一通ニ付金三錢ヲ納メシム

家督相續又ハ遺産相續ノ日ヨリ六ヶ月以内ニ願出サル  
モノハ證印稅五倍ヲ科スルノ法トス

地所質入書入

質入トハ金穀ノ借主地ヨリ返濟スヘキ証據トシテ貸主

主ニ地所ト證文トヲ渡シ貸主其作德米ヲ以テ貸高ノ利

息ニ充ツルモノヲ云フ

書入トハ金穀ノ借主地ヨリ返濟スヘキ証據トシテ貸主

主ニ地所引當ノ証文ノミヲ渡シ借主ノ作德米ノ全部又

ハ一部ヲ貸主ニ渡シ利息ニ充テ或ハ借主ヨリ米又ハ金

ヲ拂ヒ利息ニ充ツルモノヲ云フ

地所ヲ質入スルキハ貸主ニ地券ヲ渡スモノニシテ其期

限ハ三ヶ年以内トシ其年限ハ必ラス判然証文ニ記載ス

ヘキモノトス然レレ地所ヲ書入スルキハ貸主ニ地券ヲ

渡ストヲ要セス又其期限ニモ制限ナシ只其年限ノ如キ

ハ必ラス判然証文ニ記載スヘキモノナリ

質入ノ地所ハ貸主之ヲ耕作スルモノナレハ地租其他ノ

諸稅ハ總テ貸主ヨリ徵收ス然レレ書入ノ地所ハ借主之

ヲ耕作スルモノナルカ故ニ地租其他ノ諸稅ハ總テ借主

ヨリ徵收ス

質入書入ノ証文ニハ其町村戸長ノ奥書割印ヲ要ス若シ

之レナキハ其効ナキモノトス故ニ其証文ヲ以テ出訴  
 スルモ負債主財産分配ノキ先取特權ヲ失ヒ只質入書入  
 ノナキ普通ノ貸借ト見做シテ之ヲ處分スルモノナリ  
 一ヶ所ノ土地ヲ二重三重ニ書入スルハ法律ノ禁スル  
 所タリ然レモ第一番抵當ノ存スルヲ知リ承諾ノ上第二  
 番ノ金主其地所代價ノ殘餘ヲ引當ニ致シ書入スルモノ  
 ハ之ヲ許ス尤モ借主身代限ヲナスハ其地所ヲ公賣  
 シ其代金ヲ以テ第一番抵當ノ元利金ニ充テ其餘アルモ  
 ノハ第二番抵當ノ元利金ニ充ツ第三番以下皆之ニ準シ  
 テ處分シ若シ負債償却ノ後尚殘餘アレハ之ヲ借主ニ返

却スルモノナリ

質入年期中ニ天災ニテ地所流亡等其他ノ全形ヲ失フハ  
 ハ貸主ハ他ノ地所又ハ物品ヲ代リ質ニ入サセ証書書替  
 ヲ求ムルヲ得若シ代リ質ニ入ルヘキモノ之レナキハ  
 ハ身代限ノ處分ヲナスモノトス  
 池成野地成等ニ變換シ又ハ關崩等ノ爲メ其地ノ幾分ヲ  
 失フハ其變換殘存ノ地ハ貸金ノ償ヲナスニ不足スルト  
 認ムルニ於テハ貸主ハ他ノ地所又ハ物品ヲ代リ質ニ差  
 出サシムルヲ得若シ之レナキハ亦身代限ノ處分ヲ  
 ナスモノトス



## 北海道土地賣買規則

北海道土地賣買規則ハ明治五年第三百四號布告ヲ以テ制定セラレタリ而シテ當時北海道開拓ノ目的ヲ以テ移住スルモノ日ニ月ニ増加スルト雖モ元來曠漠タル土地ナレハ肥沃多産ニシテ廢業スル者尙ホ十ノ八九ニ居レリ故ニ全道ノ土地低價賣下緩期除租等ノ規則ヲ施行シ墾闢牧畜或ハ漁獵採鑛等都テ生産興業ノ途ヲ獎勵セラレタリ今其要領ヲ左ニ掲ケントス

原野山林等一切ノ土地ニシテ其官屬及ヒ人民私有ノ土地ヲ除キ其他ハ都テ人民ニ賣下ケ地券ヲ渡シ永ク其人

ノ私有地トナス而シテ其賣下ケノ土地ハ一人ニ付十萬坪ヲ以テ制限トシ手ヲ下ス後十ヶ年間除租スルモノトス

賣下ノ地價ハ上等千坪ニ付一圓五十錢中等千坪ニ付一圓下等千坪ニ付五十錢トス千坪以下ハ其割合ニ依テ之ヲ賣渡ス而シテ其地代ハ即時上納スルノ制規ナレモ家産中人以下或ハ罹災窮乏ノ者ハ三年乃至五年ノ年賦ヲ以テ之ヲ上納セシムルモノトス

北海道ニアル人民私有ノ土地ハ他人へ賣渡スル其地主ノ自由タリト雖モ其土地ヲ外國人へ賣渡シ或ハ之ヲ引

當トシテ金錢ヲ借受ルヲ禁止スルヲ内地ト同一タリ  
土地賣下ノ後開墾及ヒ其他ノ事業トモ上等ノ土地ハ十  
二ケ月中等ノ土地ハ十五ケ月下等ノ土地ハ二十ケ月ヲ  
過キテ尙手ヲ下サ、ル者ハ直チニ上地セシムルモノト  
ス  
採鑛漁獵等都テ生産興業ノ見込アリテ願出ル者ハ其方  
法取調ノ上年限ヲ極メ貸地等ヲ許可スルヲアリ

参照

明治十七年第七號布告同十三年第五十二號布告同  
六年第十八號布告同七年第六號及第五十二號布告

同五年第三百四號布告同十七年太政官第九十四號  
達

公用土地買上

公用土地買上規則ハ明治八年太政官第三百三十二號達ヲ  
以テ之ヲ定メラレタリ然レモ太政官ノ達ハ院省廳ニノ  
ミ達セラレタルモノナレハ全國ノ人民ハ之ヲ知ルニ由  
ナシ故ニ同年太政官第三百三十三號達ヲ以テ特ニ府縣ニ  
達シ公用土地買上規則中人民ニ告知スヘキ條件ハ其廳  
ヨリ管下ニ布達スヘシト命セラレタリ今公用土地買上  
規則ノ要領ヲ左ニ略述セントス

公用土地買上トハ國郡村市ノ保護便益ニ供スル爲メ院  
 省使廳府縣ニ於テ人民所有ノ土地ヲ買上ルヲ云フ但國  
 郡村市ノ保護便益ニ供スル爲メ人民ニテ鉄道電線上水  
 等ノ大土工ヲ起ス時ハ其事業ニヨリ特別官許ノ上此規  
 則ニ準スルヲ得ルモノトス  
 公用買上ハ必ス其地ヲ要セサルヲ得サルニアラサレハ  
 之ヲ行ハサルモノトス故ニ人民ハ之ヲ拒ムヲ得サル  
 モノナリ  
 公用ノ爲メ買上ル土地ノ代價ハ地券面ニ記載シタル價  
 格タルヘシ然レモ地價ノ差異ヲ生シタルモハ所有者ト

買上ル官廳トノ商議ヲ以テ代價ヲ増減スルヲ得ルモ  
 ノナリ  
 買上ヘキ土地ニ属シタル植物建物等ヲ併セテ買上ルモ  
 ハ地價ノ外別ニ植物建物等ノ代價ヲ渡ス而シテ其代價  
 ハ所有者ト買上ル官廳トノ協議ニ由ルモノナリ然レモ  
 若シ其植物建物等ヲ買上ケサルモハ地價ノ外別ニ其移  
 轉料ヲ渡ス其移轉料ハ所有者ト土地ヲ買上タル官廳ト  
 ノ協議タルヘキモノトス  
 土地植物建物等ノ買上代價及移轉料ノ見込所有者ト官  
 廳トノ間ニ許多ノ差違ヲ生シ熟議ニ至リ難キモハ双方

ヨリ評價人各一人ヲ出シ地方官之ヲ折衷シテ内務省ノ  
 決ヲ請ヒ之ヲ定ムルモノトス  
 土地及植物建物等ノ買上ヲ公達シタルキハ直ニ其代價  
 ヲ下渡シ所有者ヲシテ三十日以内ニ之ヲ引渡サシム然  
 レモ土地買上ノ際事業ノ急施ヲ要スルキハ特ニ其旨ヲ  
 所有者ニ達シ三十日以上ノ期日ヲ定メ代價ヲ申出サシ  
 ム若シ其期日迄ニ代價ヲ申出サルカ又ハ代價ニ付双方  
 見込相協ハサルキハ更ニ建物アル地ハ三十日以上建物  
 ナキ地ハ十日以上ノ期日ヲ定メ其期日迄ニ之ヲ引渡ス  
 ヘキ旨ヲ達ス但各其期日内ニ双方共現在ノ實況及其見

込ノ代價ヲ詳記シ評價人ノ意見書ヲ添ヘ地方官ノ認印  
 ナ受置モノナリ

第十章

契約

金穀地所建物貸借賣買讓與並預リ証書等凡テ民事上相  
 互ノ契約ニ記載アル諸証人ノ姓名ハ本人自ラ書シテ實  
 印ヲ押スヘキモノトス若シ自書スルコト能ハス他人ヲシ  
 テ代書セシムルキハ其事由及代書人ノ姓名ヲ己レノ姓  
 名ノ傍ニ記スヘキモノトス而シテ本人及代書人ハ必ラ  
 ス其實印ヲ押スヘキモノナリ

人民一般商業及其他ノ事ニ因リ代人ヲ以テ契約取引等ヲナスルハ明治六年第二百十五号布告代人規則ニ依ルヘキモノナリ其要領ヲ舉レハ左ノ如シ

第一 何人ニ限ラス己レノ名義ヲ以テ他人ヲシテ其事ヲ代理セシムルノ權アリ然レモ本人幼年等ニテ其事理ヲ辨シ難キハ其後見人及親族ノ者協議ノ上代人ヲ任スルヲ得

第二 代人ハ心術正實ニシテ滿二十歳以上ノ者ヲ選ムヘキモノトス

第三 他人ノ委任ヲ受ケ其事件ヲ取扱フ者ハ代人ニシテ其事件ヲ委任スル者ハ本人ナリ故ニ代人委任上ノ所行ハ本人ノ關係タリ

第四 代人ハ總理代人部理代人ノ別アリ總理代人ハ其本人身上一般ノ事務ヲ代理スル者ニシテ部理代人ハ特ニ委任スル部内ノ事務ヲ代理ス

第五 本人ヨリ代人ヲ任シ他人ト契約取引等ヲシカント欲スルハ必ラス實印ヲ押シタル委任狀ヲ與フルモノトス其委任狀ニハ總理代人又ハ部理代人タル事及其委任シタル權限ヲ明白ニ記載スヘキモノトス然レモ其家業取扱フ場所ニ於テ通常ノ事務

ヲ取扱ハシムルノ類ハ別段委任狀ヲ與フルニ及ハ  
ス

第六 代人ヲ任スルノ權限ハ豫メ規定シ難キモノト

雖モ其本人幼弱疾病事故等ニテ長ク委任セントス

ルモ其地方ニ新聞紙アラハ之ニ記入セシメ世上

ニ公布スヘキモノトス

華族ノ諸契約書ニハ從前ノ慣習ニ依リ家令家扶ノ名ヲ  
用モ何家何局等ノ印ヲ捺シ來リシモ明治九年第七十六  
號布告ヲ以テ自今ハ都テ本人ノ名印ヲ用非シメ若シ之  
レナキモ其効ナキモノト定メラレタリ又婦女子ニシ

テ一家相續セシ者ハ公私トモ他日證據ト爲スヘキモノ

トハ必ラス自印ヲ用非シムルヲ法トス

証書類ニハ凡テ年月日ヲ記載スヘキモノナリ若シ疎漏

ニシテ年月日ノ内何レニテモ畧記シタルモハ裁判上之

テ證據トナスコトヲ得サルモノトス

神社并寺院ニ於テ其社寺ノ爲メ金穀ヲ借入ル、モ若ク

ハ金穀ヲ借入ル、爲メ社寺附地所建物什器等ヲ抵當ト

ナスモハ氏子檀家ト協議シ總代二名以上ノ連署ヲ要ス

若シ連署ナキモハ其社寺神官僧侶ノ私債ト看做シ縱令

右ノ抵當アルモ其効ナキモノトス

金銀其他借用証書中借主數名連印ニテ各自分借ノ員數ヲ記シタルキハ負債者ハ其分借ノ員數ノミニ對シ辨償ノ義務ヲ負擔ス然レモ若シ分借ノ員數ニシテ記載之レナク連印中ノ者失踪又ハ死亡シテ相續人ナキキハ其借用ノ金銀及其他ノ總額ハ連印中現在ノ者悉皆之ヲ辨償スヘキモノナリ但右証書中分借ノ員數之レナキト雖モ別ニ分借ノ明証アルモノハ之ヲ以テ斷定スルモノトス

金銀貸借上ノ利息ハ明治十年第六十六號布告利息制限法ヲ以テ定メラレタリ其條項左ノ如シ

第一 凡テ金銀貸借上ノ利息ヲ分テ契約上ノ利息ト

法律上ノ利息トス

第二 契約上ノ利息トハ人民相互ノ契約ヲ以テ定メ得ヘキ所ノ利息ニシテ元金百圓以下ハ一ケ年ニ付百分ノ二十(二割)百圓以上千圓以下百分ノ十五(一割五分)千圓以上百分ノ十二(一割二分)以下トス若シ此限ヲ超過スル分ハ裁判上無効ノモノトシ各制限マテ引直サシム

第三 法律上ノ利息トハ人民相互ノ契約ヲ以テ利息ノ高ヲ定メサルキ裁判所ヨリ言渡ス所ノ者ニシテ元金ノ多少ニ拘ハラヌ百分ノ六(六分)トス

第四 第二ニ記シタル定限利息ノ外總テ人民相互ノ契約ヲ以テ禮金捧利等ノ名目ヲ用ル者アルニ總テ裁判上無効ノ者トス

第五 返還期限ヲ違フキハ負債主ヨリ債主ニ對シ若干ノ償金罰金違約金科料等ヲ差出スヘキヲ約定スルコトアルニ概シテ損害ノ補償ト看做シ裁判官ニ於テ債主ノ事實受ケタル損害ノ補償ニ不當ナリト思量スルキハ之レニ相當ノ減少ヲ爲ス  
金穀借用返濟ノ滯リタルキハ先ツ本人ニ身代限ヲ命シテ之ヲ辨償セシム若シ不足スルコトアレハ請人及証人ヲ

シテ其不足ヲ辨償セシム然レニ請人及証人ニシテ之ヲ辨償スルコト能ハサレハ其人ニマテ身代限ヲ命ス而シテ尙ホ不足スルキニハ借主並ニ請人証人ハ無論其相續人ニ至ルマテ身代持直シ次第皆濟セシムルモノトス  
借主逃亡又ハ死去シ跡相續人ナキキハ請人証人ヲシテ負債ヲ辨償セシム若シ之ヲ辨償セサレハ直ニ身代限ヲ命ス尙ホ不足スルキハ請人証人ハ無論其相續人ニ至ルマテ身代持直シ次第皆濟セシムルモノトス  
金穀貸借ノ抵當ハ凡テ賣買又ハ讓渡シ得ヘキ物件ニ限ルモノナルカ故ニ人身ヲ抵當ニ書入ルコトヲ得ス然レニ



期限ヲ定メ工作使役等ノ勞力ヲ以テ負債ヲ辨償スルハ  
此限ニアラザルナリ  
金穀等借用証書ヲ其借主ヨリ他人ニ讓渡スル(相續人ニ  
讓渡スモノヲ除ク)ハ其借主ニ証書ヲ書換サシム若シ書  
換ヘサルニ於テハ假令貸主ノ讓渡證アルモ其効ナキモ  
ノトス

參照

明治十年第五十號及六十四號布告同六年第百八十  
四號及第二百十二號布告同八年第六十三號第百二  
號及第百二十八號布告

第十一章

身代限

貸金銀滯出入ニテ身代限ヲ命スルキニハ當人宅裁判所  
門前及高札場等三ヶ所ニ身代限揭示案ヲ三十日間掲ケ  
置キ其期限中當人ニ對シ貸金銀之レアルモノ追願スル  
キニハ取糺ノ上其者ヲモ身代限財産配當人ニ編入ス然  
レモ若シ其期限ヲ過キ訴出ルモノハ一切取上ケサルモ  
ノナリ而シテ身代限ノ抵償トシテ差押フ可カラサル品  
類ハ左ノ如シ  
一 時服着替共  
男女各二通宛

一 夜具

男女各一通宛

一 本人ノ職業ヲ爲スニ必要ナル諸物品但學藝ヲ人

ニ教ヘ又ハ農工商等職業ニ必要ナル書類器械物品

等其金額五十兩ニ至ルマテ本人ノ擇ム所ニ任ス

一 食料

家族ノ人口ヲ量リ一ヶ月間用非ル飯米ヲ殘シ置ク

但男丁ハ一日ニ付五合麥ハ一舛雜穀ハ一舛五合婦

女幼少ハ四合麥ハ八合雜穀ハ一舛二合

一 鍋釜及炊具

各一通

右ニ列記スルモノ、外身代限ヲ受ケタル本人ニシテ華

士族ナレハ左ノ物品ヲ殘シ置クヘキモノトス

一 大小類

男子一人ニ付各一腰宛

一 冠服

同 一通宛

以上記載スル所ノ引殘スヘキ必要物件ノ内(現在着用ノ

衣服夜具ヲ除ク)未タ代價ヲ拂ハサルモノハ其賣主ヨリ

日限内訴出レハ現品ヲ取戻スヲ得ルモノナリ

此等差押フ可ラサル物品ヲ除キ其他身代限ノ物件ハ凡

テ入札拂ニ出ス然レモ金銀器等ノ定價判然タル物品ハ

眞價ヨリ低ク賣拂フヲ得ス且賣拂金ノ總額ハ其者ノ

負債及右一件ノ諸費用ヲ償フニ過クルヲ得サルモノ

トス  
身代限ニ遇フ者ニ對シ貸金穀其他義務ヲ得ヘキ者定約  
期限未滿内ノ處分方法ハ左ノ如シ

第一 貸金穀又ハ義務ヲ得ヘキ者定約期限未滿内ニ  
ハ訴出ルコトヲ許サ、ル規則ナレバ其負債者又ハ議  
務ヲ行フ可キ者右期限未滿内ニ身代限ニ遇フキハ  
訴出ルコトヲ得

第二 定約未滿内ニ訴出ル者ハ滿期後訴出ル者ト同

一ノ權利ヲ有シ身代限財産糶賣金ノ分配ヲ受ク

第三 請人證人等連印ニテ本人返濟相滯ルニ於テハ

引受返濟可致ノ明文之レアル證書ヲ取置タル者ハ  
本人身代限糶賣金ノ分配ヲ受ケ尙ホ不足アラハ滿  
期ノ時ニ至リ請人證人ニ掛リ之ヲ訴ルコトヲ得

第四 身代限ニ遇フ者期限未滿内ノ者ニハ滿期ノ時  
ニ至リ返濟セント欲スルキハ別段請人ヲ立テ請人  
ヨリ動不動産ヲ引當又ハ質物トナシ違變ナキヲ證  
明シテ原告人ノ承諾ヲ求ルヲ必要トス而シテ原告  
人承諾スルキハ其原告人ハ此回ノ身代限財産糶賣  
金ノ分配ヲ受クルコトヲ得ス

第五 定約期限未滿内ノ債主ハ身代限ニ遇フ負債主

ニ對シ期限未滿内ニ訴フルモ滿期後ニ訴フルモ其者ノ情願ニ任スト雖モ身代限ニ遇フ者ノ動不動産ヲ引當又ハ質物ニ取置タル債主ハ右動不動産ヲ身代限ノ糶賣ヲ爲スニ付已レノ受取ルヘキ金高ヲ求ムルコトヲ得ヘキノミニテ糶賣ヲナスコトヲ拒ムヲ得ヘカラス

第六 動不動産ヲ引當又ハ質物ニ取置タル者ハ其財產糶賣金ノ内ニテ計算シタル元利金高ヲ受取ルヘキノ求ヲナシ裁判所ニ於テハ糶賣金分配ノ規則ニ從ヒ分配スヘキ金高ヲ其者ニ引渡スヘシ

第七 引當又ハ質物ヲ取置サル金穀ノ債主定約期限未滿内ニ訴出ルキハ計算シタル元利金高ヲ受取ルヘキノ求ヲナシ裁判所ニ於テハ糶賣金分配ノ規則ニ從ヒ處分ス

身代限ノ財産中ニテ質入又ハ書入ノ地所アリテ其債主揭示中ニ訴出テサルキハ其地所糶賣代價ノ中ニテ債主受取ルヘキ元利金高ヲ第一番ニ引去リ裁判所ニ於テ之ヲ糊封シ戸長役場ニ預ケ置キ後日債主願出次第之ヲ渡スヘキモノトス

父子兄弟ノ同居或ハ別居シタルモノ、身代限ヲスルキ

其財産處分方法ハ明治五年太政官第二百七十五號達ヲ以テ定メラレタリ即チ左ノ如シ

父兄ト同居ノ子弟或ハ別居シテ財産ヲ異ニスル者又ハ父既ニ家督ヲ其子ニ譲リ隱居別宅シテ財産ヲ異ニスル者自今一己ニ金銀借受候分其証券中本家ノ戸主保証ノ調印無之上ハ貸主ニ於テ本家ノ財産ヲ目的トシ貸與フル筋無之候ニ付若シ右等ノ者共返金相滯訴訟ニ及ヒ候節同居ノ者ハ其身所持ノ品物ノミ分産異居ノ者ハ其財産ノミヲ以テ之ニ當テ身代限りニ裁判申渡候

身代限ノキ財産ヲ隱匿スルノ罪ハ刑法第三百八十八條及第三百八十九條ニ依リ之ヲ處分ス其條左ノ如シ

刑法

第三百八十八條 家資分散ノ際其財産ヲ藏匿脱漏

シ又ハ虚偽ノ負債ヲ増加シタル者ハ二月以上四年以下ノ重禁錮ニ處ス

情ヲ知テ虚偽ノ契約ヲ承諾シ若クハ其媒介ヲナシタル者ハ一等ヲ減ス

第三百八十九條 家督分散ノ際牒簿ノ類ヲ藏匿毀棄シ若クハ分散決定ノ後債主中ノ一人又ハ數人

ニ其負債ヲ私償シテ他ノ債主ヲ害シタル者ハ一月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス

参照

明治十年第六十六号布告同六年第二百五十二号布告同八年第五十三号布告同五年第百八十七号及第百八十八号布告

第十二章

民事裁判

各裁判所ノ位置及管轄區畫ハ明治十六年第二號布告ヲ以テ定メラレタリ今其布告ニ依ルニ第一ニ大審院アリ

第二ニ控訴裁判所アリ第三ニ始審裁判所アリ第四ニ治安裁判所アリテ全國民事ノ裁判ヲ管理スルモノナリ  
裁判ノ初步ヨリ其終結ニ至ルマテノ順序ニ從ヒ各裁判所ノ章程ヲ列記スルコト左ノ如シ  
治安裁判所

第一凡テ訴訟事件ヲ勸解ス但シ諸官廳ニ對スル事件及商事ニ係リ急速ヲ要スル事件ハ勸解スルノ裁ニアラス

第二請求ノ金額及價格百圓未滿ノ訴訟ニ付始審ノ裁判ヲ爲ス

第三人事其他金額ニ見積ル可カラサルモノヲ裁判スルヲ得ス

始審裁判所

第一請求ノ金額及價格百圓以上并ニ人事其他金額ニ見積ル可カラサルモノ、訴訟ニ付始審ノ裁判ヲ爲ス

第二其管轄地内ノ治安裁判所ノ始審裁判ニ對スル控訴ニ付終審ノ裁判ヲ爲ス

第三始審裁判所ニ於テ審判シタル民事ハ輕重トナク皆初審トス

第四民事ノ内外ニ交渉シタル者ハ其輕キハ直ニ之ヲ裁決シ其重キハ一面之ヲ聽理シ一面ハ之ヲ司法卿ニ具申スヘシ

控訴裁判所

第一始審裁判所ノ裁判ニ服セスシテ控訴スル者ヲ覆審ス

大審院

第一民事ノ上告ヲ受ケ控訴裁判所以下ノ審判ノ不法ナル者ヲ破毀シテ法憲ノ統一ヲ主特ズルノ所トス

第二審判ノ不法ナル者ヲ破毀スルノ後他ノ裁判所ニ移シテ之ヲ判決セシム又便宜ニ大審院自ラ之ヲ判決スルヲ得

第三已ニ他ノ裁判所ニ移シテ之ヲ判決セシムルノ後其裁判所又大審院ノ旨ニ循ハサル時ハ大審院更ニ自ラ之ヲ判決ス

第四内外交渉民事ノ重大ナル者ヲ審判ス以上陳述スル所ハ裁判所ノ組織及權限ナリ而シテ裁判官民事ノ訴訟ヲ審判スルノ心得方ハ明治八年第三百三號布告裁判事務心得方ト云フ法律ニ依テ定メラレタリ其

要領ハ左ノ如シ

第一各裁判所ハ法律ニ從ヒ遲滯ナク裁判スヘシ疑難アルヲ以テ裁判ヲ中止シテ上等ナル裁判所ニ伺出ルヲ得ス

第二凡ソ裁判ニ服セサル旨申立ル者アル時ハ其裁判所ニテ辨解ヲナスヘカラス定規ニ依リ期限内ニ控訴若クハ上告スヘキコトヲ言渡スヘシ

第三民事ノ裁判ニ成文ノ法律ナキモノハ習慣ニ依リ習慣ナキモノハ條理ヲ推考シテ裁判スヘシ

第四裁判官ノ裁判シタル言渡ヲ以テ將來ニ例行スル



一般ノ定規トスルヲ得ス

第五頒布セル布告布達ヲ除クノ外諸官省隨時事ニ就テノ指令ハ將來裁判所ノ準據スヘキ一般ノ定規トスルヲ得ス

人民告訴ノ手續ハ明治六年第二百四十七號布告訴答文例及同十年第十九號布告控訴上告手續ト云フ二法ヲ以テ之ヲ定ム今其法律ニ依リ要領ナル箇條ヲ摘録スルヲ左ノ如シ

第一訴訟ヲ爲サントスル原告人ハ其管轄ノ町村役場ノ添翰ヲ以テ被告人ノ現住管轄ノ町村役場ニ至リ被告人ノ身分ノ書附ヲ取りタル後訴狀ヲ作ル可シ

第二原被管轄ヲ異ニシ道路隔絶ナラハ原告人我管轄ノ町村役場ニ願ヒ役場ノ文通ヲ以テ被告人ノ氏名住所身分ノ書附ヲ取ルコトヲ得

第三訴狀ハ簡明確實ニシ憑據ト爲ス可キ事件ヲ掲ケ文飾冗長ナラサルヲ注意シ自己ノ想像ヲ以テ踪跡ヲキ事件ヲ述フルコトヲ得ス

第四訴狀ノ末ニ署スル氏名ハ其本人自署スヘシ若シ自署スルコト能ハサル時ハ其旨ヲ氏名ノ肩ニ記

スヘシ

右ハ原告人ヨリ差出ス所ノ訴狀ナリ而シテ之ニ答辨スル被告人ノ答書ハ左ノ定則ニ從テ之ヲ作ルモノトス

第一被告人裁判所ノ呼出狀ト共ニ原告人ノ訴狀ヲ受取ル時原告人ノ陳述スル所條理アラハ速ニ熟議シ原告人之ヲ許諾セハ解訟ヲ請フコトヲ得其場合ニ於テハ熟議解訟ノ答書ヲ作り之ヲ裁判所ニ呈スヘシ

第二原告人ノ述ル所非理不實ニシテ辨解スヘキ確證アラハ其書類ノ全文ヲ寫載シ次ニ非理不實ノ事

ヲ書スヘシ

第三答書ノ末ニ署スル氏名ハ其本人ノ自筆ヲ用ユヘシ若シ本人自署スルヲ能ハサルキハ其旨ヲ氏名ノ肩ニ記スヘシ

右ニ列記スル訴狀答書ハ代書人ニ代書セシムルモ又ハ本人自書スルモ本人ノ勝手タリ而シテ皆十六行ニシテ一行十五字詰ヲ以テ正副二通ヲ認メ明治十七年第五號布告民事訴訟用印紙規則ニ依リ訴狀ノ正本一通ニ付請求ノ金額若クハ額價ニ應シ左ノ區別ニ隨ヒ其受付ノ時ニ於テ印紙ヲ貼用スヘキモノナリ

金額五圓マテ 二十錢

同 十圓マテ 三十錢

同 二十圓マテ 六十錢

(以下畧ス)

人事其他金額ニ見積ルヘカラサルモノハ三圓ノ印紙ヲ貼用スルモノナリ然レモ人事ニ於テ極貧ノ者ニシテ戸長ノ證書ヲ所持スルモノハ裁判官ニ於テ印紙ノ貼用ヲ免スルヲアリ  
答書ハ正本一通ニ付二十錢ノ印紙ヲ貼用ス  
出訴期限

金穀貸借ヲ始メ物品賣買ヨリ其他諸般ノ取引等人民相互ニ受取渡ノ期限ヲ定メ契約ヲ結ヒ置キタル後一方ノ者其契約ヲ破リ之ヲ履行セサルトキニハ直ニ出訴スルカ又ハ延期ノ猶豫ヲ與ユルカハ全ク權理者ノ判斷ニ任スト雖トモ其延期中數多ノ歲月ヲ過去リテ出訴スルトキニハ貸方借方請人證人ノ内死亡又ハ轉住若クハ失踪等ノ者アリテ或ハ其事理曖昧ニ互リ或ハ證據湮滅シテ終ニ裁判上ノ不都合ヲ生スルカ故ニ訴訟ノ事柄ニ依リ其出訴期限ヲ定メ若シ其期限内ニ出訴セサル者ハ自ラ契約ヲ取消シタル者ト見做シ受取ルヘキ權理及引渡ス

ヘキノ義務トモ兩ツナカラ消滅スルモノトシ裁判所ニ  
於テハ假令出訴スルトモ之ヲ受理セサルモノナリ今其  
出訴期限ノ細別ヲ左ニ列記セントス

- 一 學藝ノ授業料
- 一 旅籠料
- 一 運送賃
- 一 飲食料
- 一 手附金
- 一 商人互ノ賣掛金
- 一 職人ノ手附代金

- 一 日雇人ノ給料
- 一 請負金
- 一 芝居等ノ木戸錢又ハ棧敷錢等
- 一 男女藝者ノ揚代金

右ハ六ヶ月限

- 一 醫師ノ脈診及藥料
- 一 授業師ヨリ門弟ニ給與シタル飲食料
- 一 商人ヨリ商人ニ非サル者ヘノ賣掛代金
- 一 一ヶ年期マテノ奉公人給料

右ハ一ヶ年限

- 一 期限ヲ定メタル貸付米金及利息アレハ其利息
- 一 期限ヲ定メタル預米金及利息アレハ其利息
- 一 家屋及土地ノ借賃
- 一 小作米金
- 一 證據金
- 一 敷金
- 一 物品ノ借賃又ハ損料
- 一 養育料
- 一 七ヶ年期マテノ奉公人給料
- 一 期限ナキ年金及一生涯ノ年金

右ハ五ヶ年限

條約證書中期限ナキ者ハ出訴ノ日ヲ期限ト見做スカ故  
 ニ何時出訴スルモ苦シカラス  
 人民互ニ期ヲ約シテ金銀貸借シ若シ期ニ及テ返濟セザ  
 ルハ内證屢々催促ヲナスト雖トモ期月後滿五年ニ至ル  
 マテ一度モ出訴セサル者ハ裁判ニ及ハサルモノトス又  
 無年期貸付中内證屢返濟ヲ促スト雖トモ滿五年ニ至ル  
 マテ一度モ出訴セサル者ハ裁判ニ及ハス尤土地家屋等  
 ノ貸賃ハ不動産ニ属スルモノニ付滿五年ヲ過ルト雖ト  
 モ裁判ヲ爲スモノナリ

預ケ金穀ノ訴訟ハ其證書中ニ封印ノ儘預リ置クカ或ハ預リ中融通使用ヲ爲サ、ル明文アルモノハ年數ニ拘ハラズ受理スベキノ成規ナレトモ明治十年第十二號布告ヲ以テ自今ハ其二十年以前ニ係ルモノハ一切裁判ニ及ハスト定メラレタリ

控訴上告

控訴トハ凡テ始審裁判所ノ初審ニ服セスシテ再ヒ控訴裁判所ニ訴ヘ覆審ヲ求ムルモノニシテ全ク民事ニ止マリテ刑事ニ及ハサルモノナリ而シテ控訴ハ一度ニ限り之ヲ許スモノニシテ再ヒ之ヲ求ムルヲ得ス

始審裁判所ニ於テ裁判ノ言渡ヲ爲シタルトキ原被告ノ双方又ハ一方ノ者其裁判ニ不服ナルトキハ裁判言渡シヨリ第七日マテニ裁判言渡ノ事理ヲ熟考シ其翌日ニ至リ控訴スルコトヲ得ルモノトス然レモ訴訟ノ案件商事ニ係リ急速ニ控訴スルコトヲ要スルノ場合ニ於テハ七日以内ト雖トモ控訴スルコトヲ許ス  
始審裁判所ノ言渡ヨリ二ヶ月ヲ過ルトキハ控訴ヲ許サズ又控訴ヲ爲ス者ハ其初審ヲ受ケタル始審裁判所ニ届ケ出ツルモノトス然ルモハ其裁判所ハ裁判言渡ノ執行ヲ停止スルモノナリ

上告トハ各裁判所ノ終審ヲ不法ナリトシ大審院ニ向テ  
取消ヲ求ムル者ナリ故ニ上告シタル者已ニ大審院ノ判  
決ヲ經レハ更ニ訴フルコトヲ得ス而シテ其上告スルコ  
トヲ得ル事件ハ左ノ如シ

第一裁判所管理ノ權限ヲ越ユル者

第二聽斷ノ定規ニ乖ク者

第三裁判法律ニ違フ者

民事ノ上告ハ已ニ控訴裁判所ニ控訴シ其審判ヲ經タル  
者ニ限ルモノナレハ控訴スヘキノ事ヲ以テ誤テ上告ス  
ルモノハ之ヲ受理セサルモノトス

上告セント欲スル者ハ先ツ原裁判所ニ届出テ其裁判言  
渡ヨリ二月内ニ上告狀ヲ大審院ニ捧ケ同時ニ又其旨ヲ  
被告人ニ通知スルノ成規タリ故ニ若シ此二ヶ月ノ定規  
ヲ過レハ上告スルノ權ナキモノトス

上告者ハ其上告狀ニ添テ金十圓ヲ大審院ニ預クヘキモ  
ノナリ故ニ若シ其金高ヲ預ケサルトキハ上告ヲ爲スコ  
トヲ許サス而シテ大審院ハ其預ケ金ヲ没入或ハ還付ス  
ルコト凡テ左ノ箇條ニ依ルモノトス

第一上告ヲ取上ケサルトキハ其預リ金ヲ没入ス

第二上告ヲ取上ケ原裁判ヲ破毀シタルトキハ預リ金

ヲ還付ス

第三上告ヲ取上ケ被告人ト對審シタルノ後之ヲ斥ケ

テ原裁判ヲ破毀セサルトキハ預リ金ヲ沒入ス

上告ニ付テハ裁判ノ執行ヲ停メス大審院已ニ原裁判ヲ破毀スルニ至レバ即日原裁判所ニ通報シテ執行ヲ止メ更ニ審判落着ノ日ニ至テ前ノ執行ヲ取消シテ後ノ裁判ヲ執行セシム

大審院ニ於テ不當ナル上告ナリト決スルトキハ何々ノ理由ヲ以テ上告ヲ受理セサルノ旨ヲ言渡ス然レトモ若シ當然ノ上告ナリトシ之ヲ判決スヘキ旨ヲ言渡シタル

凡ハ原被ノ對審ヲ開キ相互ノ論辨ヲ審聽シ而シテ後ニ原告人上告理アリト決スルトキハ何々ノ理由ヲ以テ原裁判所ノ裁判ヲ破毀スルニ付更ニ某裁判所ニ於テ裁判ヲ受クヘキ旨又ハ大審院ニ於テ裁判スヘキ旨ヲ言渡スヘキモノトス

凡ソ裁判所ノ呼出ヲ受タル者疾病等ノ事故アリテ遲參又ハ不參スルトキハ其事故ヲ詳記シ呼出刻限迄ニ其裁判所ニ届出ツヘキモノナリ故ニ若シ右刻限ヲ過キテ届出ルカ又ハ無届ニテ遲參不參スルトキハ裁判官ニ於テ直ニ五錢以上十圓以下ノ罰金ヲ科ス然レトモ此罰金ノ



額ハ明治十四年第七十二號布告第三條ニヨリ二圓以上  
ヲ罰金ニ處シ二圓未滿ヲ五錢以上一圓九十五錢以下ノ  
科料ニ處スルモノナリ

參照

明治十年第十九號布告大審院職制並諸裁判所章程  
同十四年第八十三號布告民事裁判權限同六年第三  
百六十二号布告出訴期限規則同十年第五号布告

第十三章

出版

凡テ圖書ヲ著作シ又ハ外國ノ圖書ヲ反譯シテ出版セン

トスルモノハ出版前政府ニ届出サルヲ得サルモノハ行  
政ノ制規ナリ而シテ其圖書ハ各人ノ腦裏ニアル智識ヲ  
書冊ニ著述シタルモノナレハ是其人ノ勉強勞働ノ結果  
ニシテ即チ其人ノ財産ニシテ他人漫リニ之ヲ侵スコト  
ヲ得サルモノトス故ニ其人ニシテ他人ノ之ヲ侵スコト  
ヲ防カント欲セハ出版條例ニ由リ其所在ノ地方廳ヲ經  
由シテ版權願ヲ内務省ニ差出スヘキモノトス然レトモ  
版權ヲ願フト否トハ其人ノ隨意ナルカ故ニ其之ヲ願ハ  
サルモノハ各人一般ニ之ヲ出版スルコトヲ得ルモノト  
ス

版權トハ著作又ハ反譯ノ圖書ヲ出版スルトキ政府ニ於  
 テ著譯者ニ與ユル三十年間ノ專賣權ヲ云フモノナリ  
 其特ニ世ニ鴻益アル者ハ版權ノ年限終ルノ後仍ホ十五  
 年ノ延期ヲ許ス若シ版權年限内ニ著譯者死スルトキハ  
 其相續人ニ殘餘ノ年限間其版權ヲ與ユルモノトス其年  
 限間ハ他人之ヲ出版スルヲ得サレモ年限終ルノ後ハ  
 各人一般ニ之ヲ出版スルヲ得ルモノナリ  
 版權ノ讓與賣買ハ人民ノ勝手タリ又之ヲ分割シテ他人  
 ニ讓與賣渡シ同一ノ圖書ヲ各自ニ出版スルコトヲ得ル  
 モノトス是レ所謂分版ト名ツクルモノナリ

版權所有主ノ都合ニ因リ從前版權ヲ得タル書冊ヲ出版  
 セサル旨ヲ以テ免許狀ヲ返納スル者ハ手数料トシテ金  
 三十錢ヲ納メシムルモノナリ  
 出版届及版權願トモ草稿ヲ添ルニ及ハスト雖モ時トシ  
 テハ内務省ニ於テ草稿ヲ徵シ検査スルコトアリ而シテ  
 其草稿又ハ納本ヲ検査シテ世治ニ害アル者ト認ムルト  
 キハ其出版又ハ販賣ヲ禁シ或ハ刻板ヲ毀タシムルコト  
 アリ  
 他人ノ著譯書ヲ出版スル者ハ必ラス著譯者ノ承諾ヲ受  
 クルヲ要ス又其既ニ版權ヲ得タル者ハ他人其條章ヲ剽

窃スルコトヲ得サルモノナリ然レトモ論辨若クハ證明  
スルタメ之ヲ引用スル者ハ剽窃ヲ以テ論スルノ限ニア  
ラサルナリ

他人ノ著譯書已ニ版權ヲ有スルモノヲ續成セント欲ス  
ル者ハ原主ニ示談シ連印ノ上願出ツルモノトス又他人  
ノ版權ヲ有スル著譯書ヲ校訂シ或ハ節畧シ或ハ註解附  
録繪圖等ヲ加ヘテ出版スル者モ亦原主ノ承諾ヲ受クル  
コトヲ要ス

外國ノ圖書既ニ甲者ノ成譯アリト雖モ乙者又之ヲ譯シ  
甲者ノ誤謬ヲ正シ又ハ闕漏ヲ補ヒ及其文意ヲシテ一層

明瞭ナラシムルノ確證アルモノノ版權ヲ願ヒ出ルトキハ  
内務省ニ於テ検査シテ後々之ヲ許シ或ハ許サ、ルコト  
アリ

同時若クハ前後ニ偶然同様ノ圖書ヲ著譯シ版權ヲ願フ  
者二人以上アルトキハ共ニ版權ヲ與フ其事情明白ナラ  
サル者ハ事由ヲ検査シテ後々之ヲ許シ或ハ許サ、ルコ  
トアリ

圖書刻成ノ上ハ製本三部ヲ内務省ニ納メ版權ヲ得ル者  
ハ其外ニ免許料トシテ製本六部ノ定價ヲ納ム而シテ納  
本セス及免許料ヲ出サ、ル前ハ圖書ヲ發賣スルコトヲ

得サルモノトス

出版條例ヲ犯シタル者ヲ罰スル方法ハ左ノ如シ

第一 内務省ニ届ケスシテ圖書ヲ出版シ及版權免許ヲ得スシテ免許ノ名ヲ冒ス者若クハ納本セス及免許料ヲ出サスシテ發賣スル者又ハ出版發賣ヲ禁止セラレタル圖書ヲ出版發賣シタル者ハ其刻板印本及賣得金ヲ沒收ス其情ヲ知テ發賣シタルモノハ罰金五圓以上百圓以下ヲ科ス

第二 凡ソ偽板ヲ作り或ハ書中ノ字句及繪圖ノ模様ヲ小變シ若クハ少加シテ其表題ヲ改メ其他總テ他

人ノ版權ヲ侵シテ出版スル者ハ罰金二十圓以上三百圓以下ヲ科シ其刻板印本及賣得金ヲ沒收シテ版主ニ之ヲ給付ス其情ヲ知テ發賣スルモノハ罰金五圓以上百圓以下ヲ科シ現存ノ圖書及賣得金ヲ沒收シテ之ヲ版主ニ給付ス

第三 無名若クハ版主ノ住所ヲ記サ、ルノ圖書ヲ出版シ若クハ發賣スル者並ニ變名偽名シ若クハ住所ヲ偽リテ圖書ヲ出版シ若クハ情ヲ知テ發賣スル者ハ禁獄十日以上六月以下ニ處シ其沒收ノ法ノ如キハ第一項ニ依ルモノナリ